キー太（狩場台）

（INDEX）

平和を願って

「宗教団体統制法」を忘れるな　（2016．9）
トカゲが育てた恐竜のタマゴ　（2017．4）
反面教師としての「日本会議」　（2017．5）
「帰って来た犬」の話は忘れない　（2017．7）
サルに学ぶ抵抗精神　（2018．6）
ヤスクニ国営化がホンネですか？　（2018．12）
もしかしてポスト米軍の列島要塞化（2019．1）
馬毛島からも目が離せない　（2019．4）
改元は「旧家のしきたり」の雰囲気　（2019．6）
私の参院選ウオッチング　（2019．8）
火に油の大阪府知事発言　（2019．9）
「奴隷」の主語を変えてみましょう　（2020．4）
とうとう「高橋是清」お呼びです　（2020．6）
もっとひどい政権もありか？　（2020．9）
まったくスガスガしくない新首相（2020．11）
「粛軍演説」の斎藤隆夫に旅する（その1）（2022.1）
「粛軍演説」の斎藤隆夫に旅する（その2）（2022.2）
「粛軍演説」の斎藤隆夫に旅する（その3）（2022.3）

読んだ見た聞いた

初めてイシグロ作品を読む　（2017．12）
熱狂の病を知るために　（2018．2）
占領日本に三分割案があったとは　（2018．7）
いつしか消えた我が家の神棚　（2018．10）
久坂葉子をどう読むか　（2019．12）
政治家に人望は不要でしょうか　―「女帝」を読んで　（2020．7）
恐慌の 1930 年代を視る　（2020．8）
「財政赤字の神話」の驚き　（2021．7）
ネットで観れる「表現の不自由展」（2021.8）

エッセイさまざま

ゲンパツなき「聖域」紀伊半島　（2016．12）
東芝の危機の意味するもの　（2017．3）
皇室は永遠の金のオリでしょうか　（2017．6）
「希望」と「幸福」どこか似ている（2017．10）
だれが船を沈没させたのか　（2017．11）
リニアは「退歩」の象徴である　（2018．1）
沖縄発「虚報」に見えたもの　（2018．3）
魔女狩り報道は忘れない　（2018．4）
保守再生の芽は残るか　（2018．9）
身を切る改革でカジノですか　（2019．10）
ケチることの時代錯誤　（2020．5）

「宗教団体統制法」を忘れるな（2016．9）

き一太　（狩場台）

私の記憶に間違いがなければだが、「宗教団体統制法」という究極の思想統制は日米開戦4年前の昭和12年に法制化されていたはずだ。なぜ、これを持ち出すかというと、アベ政権下のメディア事情やヘイトスピーチの流れるいまの状況が、あの時代に通ずるイヤな予感がするからだ。

ヒャクタなにがしとかいう小説家が「沖縄のメディアをつぶせ」とわめいたのは記憶に新しい。さらに、ネオナチかぶれが大喜びしそうなイナダ防衛大臣とかタカチ総務大臣とかは「靖国参拝は日本人として当然」と繰り返す。本気で国家神道復活を目指すのか、単なる気分なのか。この人たち、やたら国威発揚に熱心だが、日本文化の重層性や15年戦争の失敗というものに最初から関心がなさそうだ。政教分離という近代国家の原則もどこ吹く風だとすれば、もはや「政治屋」でもなく単なる復古趣味の「宣伝屋」に過ぎない。

さて、宗教団体統制法は特高警察の監視と弾圧によって支えられていた。キリスト教諸派も、創価学会などの新宗教やほんみちなど少数派も、ひたすら伊勢神宮に、皇居に向かって遥拝した。その行き着いた先は言わずもがなである。

宗教団体とは無縁でも、だれにも宗教心めいたもの（信条とか）はある。それが侵されていないかどうか、個人に返って点検するほかない。

トカゲが育てた恐竜のタマゴ（2017．4）

き一太　（狩場台）

連日テレビのワイドショーでもおなじみの豊中市における森友学園事件はいまだ進行中である。はっきりしてきたのは、積算根拠不明のまま払い下げた国有地の買戻しと小学校の条件付き認可の取り消し以外に国、大阪府の収拾策はない、ということくらいだ。問題は多岐にわたるが、あえてこの事件を寓話に例えて、その意味を絞り込んでみよう。

トカゲの夫婦はわが権力者アベシンゾー・アキエ夫妻。「アベ首相ガンバレ」などと叫ぶ森友学園の幼稚園児たちはちびっこ合唱隊ではない、洗脳された「ジャパン・ネオファシズム」の申し子であ

り、恐竜のタマゴと呼ぶにふさわしい。愛国、憂国に前のめりでメロメロの教育勅語信奉者のイナダトモミは、トカゲより大型の恐竜の近親種とみてよいだろう。いまや借金取りに追われるだけで孤立無援のカゴイケ理事長夫妻は傷ついたトカゲにも見える。

このトカゲの群れは「日本会議」なる大きなオリのなかで仲むつまじく共生しているようにみえたが、国有地売却価格を黒塗りにするという国民を愚ろうする財務省のふるまいによって、逆に自分たちの生態を白日のもとにさらすことになった。なにもやましいことがなければ、最初から黒塗りする必要はないし、一度は名誉校長を受諾したアキエトカゲだって自ら証人喚問を希望するくらいの勇気があってよいはずだ。ところが悲しいほどにシンゾートカゲがみっともない。「私も妻も侮辱された」とキャンコンキンコンと国会でわめきたてるのである。こんなふるまいをみせつけられると、トランプに抱きついたり、ハイタッチしたり、よくぞできたものだと、そのしらじらしさに圧倒される。

もはやアベなんぞ政治家以前に人物評価に値しないのだが、アベよりは少し長生きした者として忠告しておきたいことがある。それはアベが軍国主義の怖さを知らないということだ。私は連日テレビショーをみながら、カゴイケ理事長が二・二六事件の反乱軍兵士の心境を引用して「トカゲのしっぽ切りは許さない」と反撃のセリフを口にしたとき、簡単にこの事件は幕引きできないと察した。二・二六事件の青年将校たちは「天皇陛下万歳」「維新は死せず」を唱え銃殺された。彼らは一方で昭和恐慌と特権階級の支配に対し「餓えた東北を救え」のスローガンで結束し、下からの革命に決起した。義憤というのは恐ろしいエネルギーを生むものだ。

カゴイケ理事長の二・二六事件の解釈は知るよしもない。問題は最高権力者であるアベが「美しい国」を掲げてファシズム体制づくりに邁進し、自らの理想に近い仲間とみた人物を突き放そうとしている愚かな姿である。アベシンゾー礼賛のチビッコたちが実はアベシンゾーをおびやかす。トカゲが恐竜のタマゴにおののくようなものだが、昭和の血みどろの歴史をシンゾーは学ぼうとしないから、かくも軽薄な結果を招くのである。　（2017・3・28　投稿）

反面教師としての「日本会議」（2017．5）

き一太　（狩場台）

「日本の誇り」を掲げ改憲志向のアベ政権を応援する「日本会議」とはどんな組織か。それを探る新書が相次いで出版されました。「日本会議の正体」（平凡社新書）と「日本会議の研究」（扶桑社新書）です。復古調といわれるアベ氏の背後に張り付いた人脈がよく見えてきます。権力者の人間研究を怠る政府宣伝紙のごときマスコミや通俗的な政治記事に不満な方には新鮮なガイドブックでありましょう。

これらの本の指摘するところ、かいつまんで言えば、戦時中に「聖戦」を賛美し勢力を拡大した宗教団体「生長の家」に感化され、戦後は左翼学生運動に対峙してきた愛国右翼青年たちが現在のアベのブレーンとなり、国民運動を広げている。そして、彼らの自信と実績にかつての元号法制化運動があり、憲法改正運動の先頭を走っている、といった次第です。

「自分もかなり愛国右翼的」と思う私は、反共親米路線の利権右翼はロッキード事件の後は商売の契機を失って衰退したと思っていたのですが、今度は新しいタイプの思想右翼が立ち回っているのかと関心を抱き、ひと晩でたちまち2冊読んでしまいました。しかし、読後感といえば、国家神道のニオイ濃厚な政治理念が、まるで骨董品のように残されている、という印象でした。あちこちの地方にある、手入れを欠いて雑草の生えた護国神社。そこに漂うさびしさにも似ています。どうしてそう感じるのか。過去の学生運動や労働運動はもちろん、心情左翼もリベラルも保守も今はすべて埋没しているから、昔の国粋主義的な雰囲気をなつかしむ風潮が強まって見える、と表現するほかありません。

なお「生長の家」はエコロジー運動に力を入れ、政治活動から公式に手を引いたことは一部新聞でも報道されています。これらの本で紹介されたアベを取り巻く面々は、宗教系DNAを受け継ぐ旧活動家たちということになります。

明らかに改憲志向の強いこの右派系団体の今後が注目されますが、極端な皇室中心主義に陥れば再び日本はおかしな方向に向かう可能性ゼロとはいえません。本の中では、時に国際摩擦を引き起こす靖国神社に代わって国立の戦没者追悼施設の建設を自民党が検討を始めた時、彼らが全力をあげてつぶしにかかったことも記されていますから、圧力団体としての実力は相当と見なければなりません。

そうした勢力に遠慮してか、自民党の改憲草案にはいきなり「天皇は元首」と出てきます。これは当の皇室ばかりか、戦後教育を受けただれもが面食らうのではないか。戦前の滅私奉公の裏返しとして、戦後は個人が出しゃばり過ぎ、よほどこの国を悪くした？？？

アンポ法制や天皇退位をはじめとする一連の政治の動きに関し、この団体のメンバーがしきりにちらついて見えます。伝道者のごとく改憲に怪気炎をあげるサクライヨシコ氏やアンポ法制合憲論をブチあげた稀少種の法学者らです。言論戦それ自体は結構ですが、私は「またまたアベの代弁か」とさめてしまいます。

人間宣言といい、最近の天皇陛下の退位のお気持ち表明といい、戦後世代の私は「国民とともに」を実践してきた皇室を大切にと思っています。が、右であれ左であれ、いっときの権力者や特定の宗教・政治団体が都合よく皇室を持ち上げて改憲をという動きには賛同できない。

天皇さまは靖国神社に参拝しない。きわめて単純明快な事実に、いまの平和の大きな意味が隠されている、と私は考えている。（2017・2・7　投稿）

「帰って来た犬」の話は忘れない（2017．7）

き一太　（狩場台）

沖縄県を訪れたのは過去二回しかありません。最初は南部の石垣島方面の亜熱帯の自然を見る観光旅行。二度目は本島の名護周辺。この時は絶滅迫るリュウキュウアユ（南方系のアユ）を奄美大島から沖縄本島の河川に移して復活させる環境保護活動を知るのが目的でした。もう 20 年以上も前で、当時、名護について、本土メディアが伝えたのはプロ野球日本ハムのキャンプの様子くらい。普天間基地の移設報道はまだなかったと記憶しています。

二度目の旅の際、名護市の一角に赤いデイゴが咲いている公民館があったので、散歩の途中に立ち寄ったところ、住民が日々の思いを自由に書き連ね、互いに読むことができる雑記帳が一冊置いてありました。

その中のあるストーリーを読んで、胸が締め付けられた、というか、「目をさませ」とばかり、しかられたような衝撃を受けました。その内容とは、沖縄に上陸した米軍に所在を感知されないよう、ある住民が、愛犬をナタで殴りつけて山の方へ追いやったところ、犬は翌日、顔を真っ赤にして再び戻ってきたので、飼い主は思わず抱きしめた、というものでした。

筆者は年配の女性であったようです。ナタをふるったのは、鳴き声がまずいとの発作的な行動だったと思われますが、その短い描写に異様な迫力がありました。記録すること、声を出さずにいられない、表現の原型でしょうか。あの時、一字一句を書き写してくればよかったと思います。

この話を思い出すのは、阪神淡路大震災のあと、西区内をさまよっていた犬を妻が知人から貰い受けたこととも無関係ではないようです。6年後に愛犬は死にましたが、その体温はいまだ残っていて、私の感じ方を増幅させたような気がするのです。

夏にはまた、あの名護の犬の話がよみがえってきます。上陸した敵が近づいてくる切羽詰まった状況ならば、赤ちゃんの泣き声もじゃまになるでしょう。昨夏、ラジオ番組の沖縄戦特集で、看護の手伝いに動員させられた女学生らが逃げまどった体験を伝えるのをカーラジオで聞きました。そして連想が広がりました。住民も兵隊も一緒に逃げ込んだガマ（洞窟）で何が起きたか、起きうるか。

いま沖縄では、名護の埋め立て、ヘリパッド建設と引き換えに、政府は、県や市の頭越しに数千万円を直接地元の地区にばらまくなど、手段を選びません。このような分断策が、兵庫県、神戸市を飛び越えて、この西区のどこかの町内会に持ち込まれたらどうなるでしょう。沖縄への想像力を絶つことはできません。（2017･6･4　　投稿）

サルに学ぶ抵抗精神（2018．6）

き一太　　（狩場台）

早いもので、神戸・三宮でのアンポ法制反対デモに参加してから3年近く経とうとしています。属国どころか、「アメリカ合衆国ニホン州知事」と呼ぶべきアベシンゾーの下で日本の平和主義が根本から揺らいだ危機感から、いたたまれぬ思いで参加しました。

この間、日本政治は腐敗と堕落の一途をたどり、「品位回復」が急務とすら思えます。長いモノに巻かれる、権力にすり寄る伝統？のいやしい風潮が頭をもたげ、言論人に値しないアベ応援団とゴマすりメディアが後ろ向きの国威発揚に舞い上がっています。

どうやってこれを払いのけるか、改憲問題も。今の時代の気分から考えないと「自衛隊」の三文字を憲法上どう表現するかという、うわべだけの危険な政治ゲームと化すでしょう。国家デザインと平和戦略抜きの憲法論議は不毛です。

自分の立場を突き詰めれば「他国の戦争に巻きまれる危険を拡大すべきではない」の一点にゆきつきます。たとえ、孤立主義と言われようとも。もし、いまの憲法がなければ、韓国軍と同じく自衛隊のベトナム戦争派遣があったかもしれない。ベトナムからの撤退を決めたニクソンが「アジアにおいてはアジア人をして戦わしめよ」との言葉を残したことも私の頭にひっかかる。ニクソンは米中関係を最優先し、米国政治は極端から極端に走る。アジア極東において「日本置き去り」の可能性は大ありだ。米国の武器を買いさえすれば日本はそれでよきパートナーだろうか。

「憲法変えれば普通の国」が幻想なら「9条さえ守れば平和」もまた幻想と言える。しかし、アベ自身が「国民投票で改憲が否定されても何らいままでと変わらない」と言い出すのだから、改憲の動機そのものが怪しげだ。説得力のひとかけらもなく、詭弁能力しかない「こんな権力者」にもてあそばされるのは御免である。

それでも流されやすいこの国の風潮は大いに警戒しなければならない。黙ることが現状是認でイヤならば、それなりの抵抗精神で「武装」するのが庶民の知恵だと思う。

その参考になる、とっておきの短編小説がある。亡くなった渡辺淳一の初期作品「猿の抵抗」だ。ここでいうサルは神経系統に異常を持つ学用患者（要するにモルモット）であり、医学部教授の大センセイの言う通りに頭上にかざした手を真っ直ぐ下におろすと、手が大きく左右にぶれる特性を持つ。医学生たちもそれを見てセンセイの指導に納得し続けてきた。

ところが、サルも復讐を考える。バカにされ続けてきたことへのうっぷん晴らしから、ある日の授業で手をスパッと真っ直ぐ下して見せた。サルの方が権力にあぐらをかく者よりはるかに上手を行ったのだ。

この短編は10分ほどで読める。大センセイをアベ長期政権に置き換えてみてはどうだろうか。小説の発想の原点は「ハダカの王様」と私は推測している。（投稿　2018.4.30）

ヤスクニ国営化がホンネですか？　（2018．12）

き一太　（狩場台）

靖国神社の前宮司が、天皇陛下が慰霊の旅を重ねることについて「靖国神社を潰そうとしている」趣旨の発言をして辞職したことは、全国紙ではごく小さな扱いだったが、私にはとんでもない深刻なニュースと思われた。当のやめた宮司の手記が文芸春秋 12 月号の売り物にされている。

その内容たるや、神社ビジネスがうまくゆかない「いらだち」を凝縮させた弁解であって、これ以上騒がれたら困るという幕引きのホンネがにじみ出る。折しも来年は天皇様の代替わりだ。

どんな宗教団体でも支持者、信者が減ってゆけば没落する。戦前のいかに巨大な国家神道の施設であったとしても、いまの靖国神社は一宗教法人でしかない。戦没者 246 万余柱をまつる、かつての「天皇陛下のお社」だって、戦没者家族の高齢化という大波を避けて通れない。それは最初からわかっているはずで、旧態然たる国家護持を熱望するような感覚が一向に変わらない方がむしろ大問題ではないか。

さて神職エリートの道を歩んだらしい前の宮司さんは、アベ首相大好きの伊勢神宮から靖国神社にやってきて、職員のやる気のなさが気になったらしく、叱咤激励するなかで天皇様の慰霊の旅批判に及んだという。原文を引用すると「陛下が慰霊の旅でなさっていることは、あくまでもその悲惨な場所の近くで亡くなった人たちを偲ぶという行為であって、亡き人々の心霊を祀ることではありません」とある。

さらに「A級戦犯の方々の合祀も、国から名簿が送られてきたからお祀りしたもの」だそうで、政治問題化するのを案じていた当時の宮司に代わって後任宮司が逆に神社が非難されるのを恐れて合祀したという。

どうやら、天皇様批判は神社の危機感のホンネで、A級戦犯合祀は神社独自の事務的判断ということらしい。戦犯合祀の取り下げは中曽根政権が神社に依頼して拒否されてことは周知の事実である。

私がこの「独占手記」とやらで、最も奇異に感じた部分は、靖国神社が戦没者の「心霊を祀る」のであって、天皇さまは「偲ぶ行為」をしているという何ともわかりにくいくだりである。その反面、政教分離の問題が昭和天皇と靖国神社を遠ざけたとしつつ「陛下のお参りをお迎えしたい」としつこいまでに繰り返している。

しかし、どうだろう。まるで皇室を靖国神社つぶしの元凶のように「大放言」しておきながら、手のひらを返すような自己弁護が世間に通じるだろうか。

手記も書かされたのか、希望して書いたのか不明だ。ただしこの月刊誌 880 円で決して安くない。腹いせに私の想像力を少々働かせよう。心ある人物は「このままでは神社が時代に取り残される」と考えたのではないか。一方で神社を改憲勢力の拠点にと考えている政治宣伝屋たちが「早めに火消しを」と動いたのではないか。

ともあれ、この問題を最初にスクープした週刊誌の努力は評価されてよいと思う。

（　投稿　2018･11･17　）

もしかしてポスト米軍の列島要塞化（2019．1）

き一太　（狩場台）

師走の締めくくりに元町映画館に足を運び、「デニーが勝った」「宮古島からのSOS」の2本の記録映画を見た。いま、あの琉球弧で何が起きているか、さらに日本本土の基地、千島列島の北方領土に至るまで、この国の防衛がどこをにらみ、何を目指して動くのか、少しでもヒントが得られればと思ったからだ。

記録映画は住民、有権者の視点を追った淡々としたもので、単なるプロパガンダ、フェイクなるデマとは大違い。対立候補の支持者の考え、ロックギターをかきならす玉城デニー氏の選挙風景も伝えていて、沖縄の素顔が浮かび上がってくる。改めて言うまでもないが、対立候補だってもろ手を挙げて基地誘致賛成ではない。「ゲンパツと同じで事故が起きればすべてダメ。補助金を当てに地域がうるおう例なんてない」とする若い有権者のひとことに説得力があった。

パソコンではいつでも琉球新報と沖縄タイムスの主要ニュースが読めるが、定点観測という記録手段では映像がモノを言う。空撮もあるから辺野古の海をつぶす国家の暴走がよくわかる。これは単なる普天間からの「引っ越し」ではない。

「辺野古に土砂投入再開」のグロテスクな写真は新聞にデカデカと載ったが、これは政権側が沖縄県民、日本国民に「あきらめ」の印象を強めるための「政治ショーではないか」との指摘は、かなりの人々に共通する思いだろう。これから十数年かけて、当初からどれだけ費用をかさ上げして軟弱地盤を埋め立てるかと考えれば、計画の非合理性に突き当たる。私は米軍の再編で海兵隊がいずれ沖縄常駐をやめても陸自に発足した日本版海兵隊が半永久的に使うつもりではないか、と思い始めた。

宮古島もひどいものだ、島中心の地域の守り神をまつる森の周囲が無残にはぎとられ、巨大なミサイル基地建設が進む。もともと沖縄は水不足の土地と聞いてはいたが、基地建設が大量の水を使い、基地からは強力な電磁波が発せられるのだという。これでは住民に不安を持つなと言う方が無理である。

映画は2日間に計 4 回上映されたが、私が電話予約を入れた際は、せいぜい五、六十人の上映室はほぼ満席で、かろうじて入り込めた。「基地が来るということは戦争が来るということ。沖縄の人はそのことを直感的にわかっています」こう言って影山あさ子監督は次の上映地札幌へ向かうという。あちらも予約いっぱいだそうだ。

ひさしぶりに元町を歩き、ビール一杯を飲み、ぼんやりする。と私の頭にふっと浮かんできたのは江戸幕府の圧政に抗した大塩平八郎の乱である。まともな右翼はいまや稀少で、カネと権力に寄生する愛国広告宣伝屋たちがひしめくこの国において、黙ること、見て見ぬふりは罪なのだ。

（　投稿　2018･12･24　）

馬毛島(まげしま)からも目が離せない（2019．4）

き一太　（狩場台）

池澤夏樹氏の連載「終わりと始まり」(3月7日付け朝日新聞夕刊)で、普天間基地の移設先を「馬毛島に変更一考を」とあるのを読んだ方は多いと思います。沖縄で生活体験がある池澤氏はたしか数年前に同じ朝日新聞で「移設について私案はある」としつつ、混乱を避けてか具体名を伏せていました。私はいったいどこかと関心があったので「あ、やはり馬毛島」と思った。

種子島の西 12 キロにある周囲 16 キロの自然生態系豊かな無人島。行政区画は鹿児島県西表市にあり、ロケット関連施設の誘致やらいろんな構想があったらしい。島の 99%を占める土地の所有者はかなり早い時期から防衛省と折衝し、価格交渉では一時期 10 倍の開きもあったとか。不動産売買につきまとう交渉テクニックかデマか私には確かめようないが、中国が買い取り希望との情報も流れたらしい。もちろん基地誘致に反対はあったが、政府は米軍機の空母離着陸訓練にと大金 160 億円をつぎ込むことを今年1月に決定した。実は民主党政権時代の鳩山内閣もここを移転先に検討した形跡もあったのですが、何の担保もない「最低でも県外」の声はかき消されたのは周知の通り。

池澤氏があえて今回、自ら「不動産屋のごとく」とお断りを入れて馬毛島を挙げたことは、島の買い上げが決まっていること、普天間も辺野古の解決もとんでもない時間とカネのかかる泥沼状態にあって、軍事的合理性にもほど遠いことを見越してのことでしょう。沖縄の県民投票に示された「辺野古埋め立て反対」の民意を全く無視し、オウム返しに「唯一の解決策」として土砂投入を続けるのは旧政権をなじるアベ首相やスガ官房長官らの自らの無責任の表明でしかなく、現政権のサボタージュと映る。

かく言う私は机上で考え、地図を眺めるだけで、馬毛島に足を運んでいないことが心苦しい。しかし、要塞化が進む琉球弧の島々について本土メディアの情報は質量とも乏しく、自分なりに情報を集め思いめぐらすほかない。

台湾に最も近い与那国島では4年前に陸上自衛隊の駐屯を受け入れるかどうか重い決断を迫られ、過疎の島の未来を背負う 15 歳以上の住民を対象に住民投票をした末に受け入れを決めた。ところがこれについても「少年に選挙権もない」と非難するヘイトまがいの冷や水が浴びせられた。少し考えれば、この住民投票は町長や議員を選ぶわけではなく、公職選挙法に反したわけでもない。さらに言えば、単純過ぎる外国脅威論や反日探しのごときは何の解決にもならない。

沖縄の基地も北方領土の問題も冷戦時代から続く日本防衛の根本課題としてある。行きづまり打開にはあらゆる柔軟な発想、論議が必要だ。なにしろ列島全体が沖縄化しているのだから。

（　投稿　2019･3･10　）

改元は「旧家のしきたり」の雰囲気（2019．6）

き一太　（狩場台）

この春は「平成最後の」「令和初の」といった修飾語がうんざりするほどあふれ返りました。プロ野球の実況でも「令和初のホームランは〇〇選手の一発」という具合。他愛もなく空疎でもあり、バカにするわけにもゆかず、直立不動で万々歳する気にもなれない。私は一連の皇室セレモニーについて「こりゃ旧家のしきたりみたいなものだ」と自分に言い聞かせた。正月に旧家に帰ると仏壇にむかったり、昔なつかしの椀で雑煮を食べたりする、あの感覚に近いのではないか。

以前の昭和から平成への代替わりのさなか、私は東京から京都に転勤した。東京では何とも暗い自粛ムードがあって、銀座や新橋近くの一杯飲み屋の空気もぎすぎすしていた。京都にやってくると、一連の代替わり行事として、今の上皇さまご夫妻を迎えて茶会も開かれていた。その茶会の印象を出席した歴史学者に聞いたところ「これはお茶を濁すという締めくくりだよ」と笑った。京

都も奈良も皇室のふるさとだ。京都の人は皇族が来ると「ふるさとに帰ってきた」くらいの感覚で格別大騒ぎしないようだ。

京都暮らしが長い友人にも久しぶりに会い、メシを食いながら質問した「これからずっと先、天皇制はどうなるだろうね」と。彼いわく「百年か二百年先は天皇一神教という一宗教法人になっているかもしれないね」である。これはもちろん可能性でしかないのだが、王政打倒で権力者をギロチン台に送るようなヨーロッパの野蛮な歴史をこの国は持っていないし持てないだろう、というのが彼の基本認識にあるのだった。古くは壬申の乱や南北朝時代はあったけれど。

さて新元号の「令」は命令の令か、うるわしき「ご令嬢」の令か、要するに好みの問題と思う。むしろ今、女性宮家の創設の是非、安定した皇室制度のありようが最も大きな課題なのにアベ政権はまたまたサボタージュを続け皇室典範の改正はそっちのけ。憲法9条のつまみ食い改憲に血走っている。

私は以前にもこの欄に書かせてもらったが、憲法の最初にでてくる象徴天皇のありようは9条に匹敵する国民的議論が必要と思う。女性の天皇は過去9人いた、という説も参考になるでしょう。ところが自民党の改憲草案にはいきなり「天皇を元首とする」とあるだけ。世襲については男か女かも不明。どっちでもいいからとにかく「元首」にしないと気が済まない超保守派の人たちは、かつて私の友人が示唆した「宗教法人天皇一神教」を設立すればいいと思います。宗教法人として偶像崇拝でも何でものびのびと。年の初めには直立不動の君が代大合唱でボリュームを競うコンテスト。どうでしょうか。　（　投稿　2019･5･5　）

私の参院選ウオッチング　(2019．8)

き一太　（狩場台）

例えるなら、れいわ新選組を立ち上げた山本太郎は反射神経鋭いボクサーでしょう。あのモリトモ学園事件が国会で採りあげられた時「これはアッキード事件だ」のひとことで、プライドの塊り（裏返せば劣等感の塊り）であるアベシンゾーの鼻っ柱にパンチを見舞い、「妻も私も侮辱された」と激怒させたシーンは強烈でした。NHKはじめ忖度根性に染まった「目隠しメディア」は権力のふところに飛び込む気配すらありません。国会はコトバで闘うリングでよいのです。

フクシマの核惨事を機に政界に飛び込んだ山本太郎は有権者の好みが分かれやすい異色の存在でしょう。けれども私はこの国での生存の可否をかけて政治を立て直そうという彼の発想はラディカルでもないし、むしろ当たり前と思う。権威、権力、組織をカサに馴れ合い政治でこの国がどんどん劣化する動きに対し、庶民の側から歯止めは絶対に必要だ。

山本演説はわかりやすい。「消費税は強制的な物価値上げ」「前回消費税アップ分は 16%しか福祉に回っていない」。いまや消費税は目的税かどうかさえ怪しく、税率を上げて税収減というバカな結果になりかねない。アベの指南役と思えたハマダ何とかとかいうエール大学のセンセイは消費税率アップに消極的な発言を残してマスコミから遠のいた。

右肩上がりならぬ右肩下がりの現実を前に小手先の判断で選挙に臨んでも意味がない。世直しか惰性か、ウソとホラの政治を絶つか否か、それこそが与野党の対立軸でしょう。私なら「アベファシズムか否か」と問う。国政への信用を破壊した張本人はだれか。

西神ニュータウンが生まれたころの「一億総中流」はとっくの昔話。目前にはオリンピックと万博、そして維新の看板である大阪湾カジノ島計画と「夢よもう一度」のメニューは並ぶが、その後に何が来るだろう。規制緩和イコール善と取り違えた新自由主義が、弱肉強食のシステムを「自己責任」にすりかえ、庶民の疲弊感がじわじわ強まります。

フルイにかけて政治学者センセイの話を引用しよう、東京工大の中島岳志は山本について「これまでのような右か左かではなくて、上か下かと選択を迫っている」。ズバリです。ほかのアナリストからは「彼は左のポピュリスト」の声も上がる。つまるところ深刻な格差社会が映し出されているのです。

ネット上では「山本演説を聞かなければアベノウイルスに感染するところだった」。さらには「山本太郎は次の東京都知事選もアタマにいれているのでは」と気の早い観測気球も上がった。れいわにとっては比例区で2%の確保が理想でしょう。それでなくても一人が当選すれば、新たな潮流は生み出せるということか。

所要で東京へ出かけた7月6日夕、JR新宿駅東南口で、れいわ新選組の演説をしばし聞いた。街頭寄付も盛況で熱気ムンムン。れいわから東京選挙区に出た沖縄出身の創価学会員の候補が「池田大作先生の教えに反する」と公明党批判の大声を上げていた。

東京の選挙はやはり面白い。無関心・無党派層に切り込む最前線に明日のヒントがある。

（　投稿　2019・7・19　）

火に油の大阪府知事発言（2019．9）

き一太　（狩場台）

ポロリ本音どころではない、これは敵意である。日本維新の会幹部である大阪府の吉村知事が愛知県で起きた「表現の不自由展」中止問題をめぐり、この展示を認めた愛知県知事は「辞職に相当する」と定例記者会見で表明した。

発言の場が、大阪でなく全国知事会の席とか外国特派員がいる日本記者クラブであったら、騒ぎに拍車だろう。選挙中の応援演説でもないのに現職知事がよその県知事を公然と攻撃したことに私は唖然とした。

吉村発言は8月8日付けの短い報道（朝日新聞大阪本社発行分）にある。要約すれば従軍慰安婦を思わせる像や昭和天皇に失礼な展示は公の場にふさわしくない、の一点である。裏には、類似の少女像が大阪市の友好都市だったアメリカの、アジア系市民が多いサンフランシスコ市に設置され、吉村氏が大阪市長の時に抗議して友好提携を解消したことが思い出される。さらに「不自由展」を「日本人の心を踏みにじる」とした名古屋の河村市長（減税日本代表）への応援もあったろう。

発言の背景はわかるが、発言の趣旨が「退廃芸術論」に近いなら、反発があって当然だ。権力者が快不快の個人感情を優先すれば表現はたちまち萎縮する。行き着く先は「美しい日本のココロ」とか、歯の浮くような「オモテナシのココロ」が氾濫するくらいだろう。この国の空疎なプロパガンダの歴史は「戦争絵画」に如実である。動員された画家たちは戦後の公開を嫌って沈黙し続けた。

風刺とかイロニーとか、表現に「毒」が潜むのは当たり前で、「反抗の文学」も「抵抗の芸術」も世界中にキリがない。それを腑分けして、宝だ、インチキだと決めるのは最終的に鑑賞者個人である。吉村氏は少女像を「プロパガンダ」と突き放したが、吉村氏の発言もまた「政治的プロパガンダ」であることを否定しようがない。

30 数年も前に富山県立美術館を舞台に起きた「天皇版画事件」を思い出す。その当時、私は北陸に住んでいたし、展示をはずされたコラージュの写真から想像したのは「日本の焼け跡の心象風景」のようなものだ。ところが騒ぎに火がつくと「ご真影大切」の情念が噴き出すごとく、図録は棄てられ、「前衛」を掲げた美術館の看板は色あせた。

話を戻せば、今回の表現中止事件で特に注意すべきは、展示会場へ放火テロ予告の脅迫が続いていたことだ。非常事態おかまいなしの発言を受け流すことはできない。

（　投稿　2019･8･10　）

「奴隷」の主語を変えてみましょう（2020．4）

き一太　（狩場台）

「奴隷にとって一番不幸なことは、奴隷が奴隷であることを忘れた時である」。高齢世代の私にふっとこの言葉がよみがえってきます。

この言葉はギリシャの哲学者かだれかが言い出したらしいのですが、私には映画「スパルタカス」の強烈なシーンとなって見えてきます。それというのも映画俳優のカーク・ダグラスの死去が

伝えられたからです。彼は「スパルタカス」を製作し、主演しました。半世紀前、私は雪国で下宿する高校生で、町の洋画館でそれを見ました。

奴隷同士が剣闘士として、ローマの闘技場で貴族ら大群衆の前で戦う。短剣のスパルタカスは槍を持った相手に追い詰められ、あわや最後というところで、相手はふいに槍をスタンドに投げつけ、自分もよじ登ろうとする。その場面がくっきりよみがえるのだから青春時代に見た映画の影響力はなんとも大きい。

ところで「奴隷にとって」の言葉はいまの世にとって切実に聞こえないでしょうか。たとえば坂道を転げ落ちるような頽廃極まるこの国の政治。主語の「奴隷」を「国民」「主権者」「納税者」に変えてみたらどうなるか。あまりにもバカにされすぎた現状が見えませんか。

ヘイト発言や非正規雇用や性差別など分断が深まる一方のようですから、「奴隷」を「私」「女だから」「パート労働者」などと言い換えてもいいでしょう。

反乱を指導したスパルタカスは人間解放の英雄と私は受け止めました。ローマ時代の戦争を扱った映画にはしばしば「ガレー船」が登場しました。船底で大勢の奴隷が足を鎖につながれて、太鼓のドンドンに合わせてオールを漕ぐ。人は黙っていると、現代のガレー船に送り込まれることになりかねません。　　（　投稿　2020･3･3　）

とうとう「高橋是清」お呼びです　（2020．6）

き一太　（狩場台）

連日あふれるほどのコロナ関連報道で、とうとう「高橋是清」の名が出てきた。関西のどこかの私大の学長さんか、世界恐慌の再来となりかねない経済危機への対応に「いまこそ高橋是清のような政治決断が必要だ」と民放インタビューに答えていた。その一言に私は炊事の手を止めテレビを振り返ったけれど放送はそれまで。

5月半ばを過ぎてもアベノマスク2枚すら届かない。ウイルス検査態勢も防疫予算も韓国、香港、台湾にはるかに立ち遅れ。東京五輪と習近平の来日延期の後に見えてきたのは、暗く長い不況のトンネル。そこへ昭和恐慌に立ち向かった高橋是清の名が急浮上した。

二･二六事件で皇道派青年将校に暗殺された高橋是清。江戸で絵師の子として生まれ、仙台藩の足軽の家に里子に出され、アメリカ留学（というより冒険）の後、鉱山や銀行の経営も経験し、日銀総裁、大蔵大臣、総理大臣をつとめたその波乱の生涯に私も関心はあった。

手元にある津本陽の伝記小説から受け売りすると、実業界の荒波にもまれ、金融･財政の感覚を磨いた高橋は日露戦争の戦費をひねり出すため、米英仏の政府や銀行を奔走して借金（外債発行）を工面し、国内においては銀行の取り付け騒ぎをモラトリアム（一時取引停止）の荒療治で鎮め

た。政界を退いたのちに再び手腕を期待され大蔵大臣に引っ張り出されたものの、泥沼の日中戦争で軍事費が膨張してゆくのを抑えにかかり、他の重臣とともにクーデターの標的にされた。

その時の昭和 10 年の政府予算は5割近くが軍事費というからすさまじい。二・二六事件の背景には疲弊しきった国内事情と戦争を続けなければ経済が回らない重圧がのしかかっていた。

今に戻れば、高橋のような財政通で恐慌に立ち向かう無私な政治家がいるだろうか。「国難」の連発がお得意なアベシンゾー内閣総理大臣は「万全を期して」「全力を挙げて」と言い張りますが、相変わらず中身が貧弱。それどころか、この機に非常事態に備え改憲をとか、検事総長人事に向け唐突な定年延長法案をゴリ押しする。もしかして、政権中枢が最も恐れているのは自民党本部が破格の1億5千万円（元は政党交付金）をつぎ込んだ広島での河井前法相の妻らに対する選挙違反事件捜査の行方ではないか。三権分立も世論もどうでもいい。オオカミ少年よろしくあわてて検察をいじくり回す裏にはとんでもない爆薬が隠されている？

残念ながら高橋是清に比べるような人物をいまのオトモダチ内閣に探すのは無理。けれども、「ちょっとマシ」はたくさんいます。　（　投稿　2020・5・16　）

もっとひどい政権もありか？　（2020．9）

き一太　（狩場台）

蒸し暑さとコロナ対策マスクから逃れようと、おんぼろテントの点検もかねて、一人出かけた香住海岸のキャンプ場。イカ釣り船の漁火を眺めたあと、隣のテントにいた男と音楽、映画、政治まで延々2時間近く、焼酎を飲みながら真夏の夜の談議となった。ソーシャルディスタンスはテーブルをはさんで2メートルでマスクなし。別のテントの客が親切にも出来立ての小魚のから揚げを差し入れてくれた。

話し相手の彼は私より二回りは若い 40 代か。聞けば、トランペット奏者としてキャリアも積み、いまはアート関係のプロデュースのような仕事をしているという。私はジャズが好きなので、「トランペットはロイ・ハーグローブがいい」と言うと「いやに詳しいなあ」と話に乗ってきた。

彼はアートと政治に関心があり、愛知トリエンナーレに話が及び、大阪府の吉村知事の愛知県知事攻撃が危険であることを私が言うと、同感だという。大阪府知事は事の本質をわきまえず、やたら他県の知事を非難する礼儀知らず、というのが私の印象だ。どうも謙虚さがなく、カジノにすがりつく姿勢も変わらない。おそらくナチスの頽廃芸術論も考えたことはなく、オオサカファースト以外はどうでもよく、威勢よくラッパを吹いてニッポンファーストにのしあがりたいのだろう。

「維新の連中が日本を牛耳ったらアベ政治よりひどいことになりませんか。愛知県の知事はもともと保守ですよ。彼がいたから文化行政はかろうじて救われた」と話し相手は言った。

先にこの欄でも取り上げたが、吉村知事は、愛知トリエンナーレについて、慰安婦像問題だけからめて「愛知県知事は辞職するに値する」と在阪メディアに八つ当たりした。それはコロナ禍についてのイソジンうがい薬効果の先走り発言と根が一緒だろう。これについては政治学者の山口二郎が「まるでトランプ並み。消毒剤を注射せよと同レベルだ」とあるネット番組で一蹴していたことも思い出す。

政治の舞台が急転しそうで「ポストアベ」への動きに拍車がかかりそうだ。安易な予想は禁物だが、せめて「アベ政権よりもっとひどい政治」の出現も警戒しなければならない。キャンプ場で出会った彼のいうごとく。　（　投稿　2020･8･27　写真も筆者撮影「香住海岸の漁火」拡大 ）

まったくスガスガしくない新首相（2020．11）

き一太　（狩場台）

政権中枢でひたすら敵と味方を選別し、意に沿わぬ者は手段を選ばず排除する。前川喜平・文部事務次官の追い出しや法制局長官の首すげ替え、露骨過ぎて失敗に終わった検事総長人事への介入。

アベ政権が官邸官僚と御用マスコミを使ってさんざん繰り返した陰湿な人事。その露骨な仕分け作業を支えてきたのは官邸官僚と大番頭スガの得意技であったろう。秋田県出身で、酒も飲まない「パンケーキ好き」「たたきあげの苦労人」などのイメージを売るスガは就任早々、官僚たちに「排除」を公言した。そして、おやおや、日本学術会議の人事までいじくり始めた。「やっぱり」「予想以上にひどい」の到来である。マスコミは遠慮してアベ政権に「ファシズム」の言葉を使わなかった。しかし、私はアベも、後継のスガもファシズム体制に突き進む体質が同じに見えた。スガは「ニセおしん」と言ってよい。アベはすぐキレるボンボンならスガは我慢強く腹黒い。

横浜市議からのし上がったスガは希少種改憲ガクシャやカジノ利権とつながりが指摘されていたし、大阪維新の会と公明党の対立にも裏からいろんな手を回し、両者を政権相乗り競争に引き込んだ。辺野古の問題を抱える沖縄でも振興策にディズニーランドを誘致するとかいろんなアドバルーンを上げて、かなりのハッタリ屋でもあるらしい。しかし、この国の未来をリードできるような器とはとても思えない。田中角栄が権力を握った当時の「いま太閤」の国民的盛り上がりと比較すればよい。

政府組織とはいえ政策決定権のない学術会議という集団に霞が関の役人のように「服従しろ」と迫ったのが今回のガクシャ6人に対する任命拒否という見せしめの愚挙。「ガクシャ先生大いに議論どうぞ」なんてことはお世辞にも言えない猜疑心の持ち主だろう。御用学者やゴマすりマスコミ大好きのイナカ臭くて露骨なエゴむき出しのオッサンの素性は見えた。「君の意見には反対するが、君が主張する自由は絶対に守る」。彼はボルテールの説いた民主主義の基本原理すら知らない

のではないか。いずれ子供たちにもバカにされるだろう。なぜなら子供たちは学校教師の露骨なえこひいきに敏感で批判的なのだ。

新官房長官のカトウに至っては記者会見の木で鼻をくくる態度がスガにもまして高圧的で発言の中身スカスカである。

アベ政権が続いた8年近く、テレビに貧粗な政治家3人の顔が登場するたびに、私の食欲は減退した。ニタッとしたアベ、ヘラッとしたアソウ、そしてムスッとしたスガ。彼らにおよそ人徳を感じたことはないので私は心の中で「ニタヘラムス内閣」と呼んでいた。そう、改憲をめざしてアソウが「ナチスを見習っては」と言ったことは忘れない。いまのスガはムッスリーニ政権だ。なんの因縁か、語呂もムッソリーニそっくりではないか。

「自民党は自浄能力がないからもはや野党が外圧を強めて緊張を取り戻すほかない」。こう主張する元自民党の中村喜四郎の言葉に私は政治家の誠意を感じ取る。100 人に1人でもいい。草の根自民党員たちよ怒ろう。アホな指導者はこの国を衰退させる。　　（投稿　2020･10･2）

「粛軍演説」の斎藤隆夫に旅する（その1）（2022.1）

き一太　（狩場台）

戦前の軍部に抵抗した議会人の斎藤隆夫（1870～1949）。帝国議会から除名されることになった「粛軍」「反軍」演説はあまりに有名だが、斎藤の故郷が兵庫県豊岡市出石町であることを私はつい数年前まで知らなかった。せっかく神戸に住んでいるのだから、一度は斎藤のふるさとを訪れたいと思っていた。

生誕地跡に整備された斎藤の記念館「静思堂」を訪れたのは 10 月。ちょうど決選投票へ向けた自民党総裁選の真っただ中で、ネット上はアベ元首相応援団とおぼしき勢力から猛烈なコーノタロー攻撃とタカイチサナエ礼賛が渦巻いていた。タカイチ氏を「和製サッチャー」と持ち上げ、ドラムを叩いていたとか、六甲山をバイクで走り回ったとか、どうでもいい宣伝も流れていた。そんなときこそ「政治家のまともな言葉」を聞きたくなるものだ。

城下町の出石でそばを食べた記憶はあったが、「静思堂」の名が観光コースにあったかも不明だった。しかし、実際に足を運ぶと道もよく、小高い山々に囲まれたよき田舎の雰囲気があった。木造の大きな平屋が一棟。前庭に「郷土の偉人　斎藤隆夫先生生誕の地」の看板。
玄関にはブロンズの胸像。私は修学旅行の生徒の気分で拝観料よろしく小銭を納めて広い座敷に上がり込んだ。

見渡すと壁にはこの国の歴代総理大臣の揮毫がずらり並ぶ。三木武夫「正気放光」海部俊樹「対話

改革」、なつかし田中角栄は堂々たる筆の運びで「不動心」。ライバル政治家もここに勢ぞろい。さすがに書も立派、と感心はしたものの、安倍晋三「寂然不動」を前にふと疑問が湧いた。この人こんなに書がうまかったの？

海軍中尉の経歴があり、いくらか文人の雰囲気があった中曽根康弘氏なら俳句も作り、茶を献じたりするだろう。けれど、トランプ氏に抱きついてゴルフしてはしゃいだアベ氏のイメージと眼前の墨書がどうも結びつかない。この違和感はあまりに字がへたな私のコンプレックスにも起因するだろう。

お茶を入れてくれた女性に私は愚問を覚悟で聞いた。「アベさんは実際にここに来て書かれたのでしょうかねえ」。答えは明快だった。「いえ、ここにある書はみな送られて来たものだそうですよ」

なにやらほっとした。顕彰会の人たちが書を集めた苦労は想像できるが、私はだれかの筆跡鑑定のためにここにやってきたわけでもない。
（記 2021･11･20 狩場台 き一太）

静思堂駐車場前の案内板（豊岡市出石町中村）

「粛軍演説」の斎藤隆夫に旅する（その2）（2022.2）

き一太　（狩場台）

静思堂でNHK特集のビデオを見た後、自伝「斎藤隆夫回顧七十年」（中公文庫）を買うことができた。家に帰って読み始めると、表現は簡潔で、内容はさながら暗黒の昭和史入門書だ。昭和 11 年（1936）の「粛軍に関する質問演説」と4年後の昭和 15 年（1940）の「日中戦争に関する質問演説」の全文も収めている。後者が「反軍演説」と略されることが多いが、どちらも斎藤が危惧した議会政治の崩壊と戦争拡大への危機感の表明である。

粛軍演説は、戒厳令の敷かれた二･二六事件直後の帝国議会であった。1時間 25 分に及ぶ演説の力点は反乱事件の原因と軍部への責任追及だ。「軍人の政治運動は断じて厳禁せねばならぬ」「青年軍人の思想は極めて純真ではあるが同時に危険である」「裏面において糸を引いている、こういう者は一人もなかったのであるか」

天皇の絶対的権威の利用を意図したクーデターの動きは三月事件、十月事件、五･一五事件、二･二六事件と続発し、重臣虐殺と戒厳令にいたる。

天皇制国家が内側から転覆する危機を論難した「粛軍演説」は国民感情を代弁した名演説と報じられた。東京日日新聞には表題「斎藤氏熱火の大論陣、国民の総意を代表し今事件の心臓を衝く、軍部に一大英断要望」とあった。

再起にかけた選挙での訴え

が、わずか4年後の 1940 年、今度は斎藤が議会から除名される屈辱的処分が待っていた。
「日中戦争関する演説」で、泥沼の中国戦線に打つ手なしの近衛政権を真っ向から批判したためで、演説の要点は議長職権で議事録から削除された。復刻された部分には「ただいたずらに聖戦の美名に隠れて国民的犠牲を閑却し」と警告し「内閣は辞職をすれば責任は済むかは知れませぬが、事変は解決しない。護国の英霊は蘇らない」などと激しい言葉が繰り出されている。

この斎藤演説はNHKラジオアーカイブでも聞けるが、ヤジより拍手の波のほうが明らかに大きい。議員の多くが内心は斎藤に同調しながら後に斎藤を見殺したことがうかがえる。
懲罰にかけられた斎藤の除名に反対投票したのは出席議員 305 人中わずか 7 人だった。「吾が言は、即ち是れ万人の声 褒貶毀誉は、世評に委す」。除名された直後の斎藤の心境が静思堂の一角に貼り出されている。

東条内閣の下の翼賛選挙で斎藤は非推薦の不利な立場から妨害をはねのけて議席を回復した。
（記 2021･12･4 狩場台 き一太）

「粛軍演説」の斎藤隆夫に旅する（その3）（2022.3）

き一太 （狩場台）

「聖戦の美名と国民の犠牲」を口にしたがためにたちまち議会から除名された斎藤隆夫。その政治的立ち位置はどのようなものか。

彼は「天皇親政」「開国進取」を説く明治の典型的な国家主義者と思われる。小作争議や労働運動の経歴もなく、もともと左翼の系譜には属しない。青年軍人や民間右翼に巻き起こった急進的「国体改造」の思想を特に危険視した。また第二次近衛文麿内閣の新体制構想については「国情を無視したナチスの模倣」とまで断じている。

斎藤演説には「立憲政治」の言葉がひんぱんに出てくる。これは大日本国憲法の「立憲君主制」であり、政党、政治家は天皇の下で国民のための公明正大な争いをすべきだ、との考えだ。斎藤は大日本帝国憲法の解説書の中で「大臣の責任」を、一方で徴兵や納税義務のある「臣民」の権利も強調した。万世一系の天皇制を自明のものとし、明治以来の整備された法制度を「諸外国にくらべてそん色がない」と言い切っている。斎藤は若槻礼次郎内閣の下で法制局長官もつとめた司法界のエリートだった。

斎藤の憲法論はいまの国民主権と逆の時代の産物だが、私はためしに国立国会図書館がインターネットで開示する斎藤の憲法解説を拾い読みしてみた。その中で、戒厳令については「臣民」の権利義務停止につながるとして慎重な解説を示している部分があった。これは今の改憲願望派がちらつかせる非常事態条項と戒厳令には同質の危険が潜むことを予知させる。斎藤の解説を安易な改憲いじりへの警鐘と読むのは可能だろう。

斎藤の私生活はどうだったか。さほど裕福でもないらしい自作農の出だが、向学心すさまじく、二度も家出して書生になり、早大の前身の東京専門学校を首席で卒業して弁護士になり、エール大学に留学して諸外国の政治制度を研究している。留学中は肋膜で1年をフイにし、八人の子のうち三人を相次いで病気で失った。関東大震災、東京大空襲で自宅を二度焼失し、終戦は疎開した故郷の但馬で迎えている。戦後は小党分立の中で吉田内閣、片山内閣でそれぞれ国務大臣に就いたが、期間は晩年の二年と短かった。

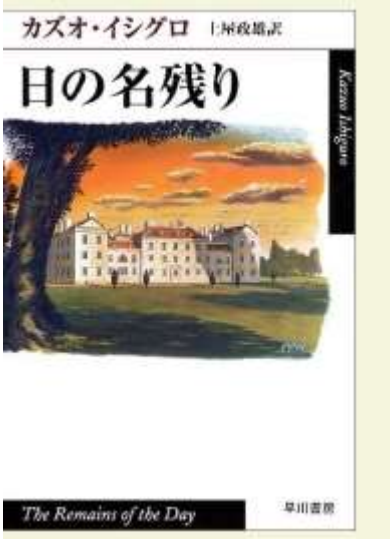
静思堂入り口にある斎藤の胸像

駆け足で斎藤の人物像を探るうち、没後二十年ほどのちの選挙でも「斎藤」と書かれた票が出てきたというミステリーじみた話にも出くわした。ケチな利益誘導とか政界の親分子分関係を徹底して嫌ったこの政治家がなぜ圧倒的な支持を但馬で集めて 13 回も当選できたのか、これも興味深いことである。

（記 2021･12･8 狩場台 き一太）

初めてイシグロ作品を読む（2017．12）

き一太　　（狩場台）



すっかり色あせた写真もよく見れば、いろんな思いをかきたてる。「日の名残り」とは大英帝国の昔の気風がぼうっと浮き出るような小説でした。

「カズオ・イシグロ」の名をノーベル賞報道で初めて知り、あわてて書店に注文しました。秋の夜長を楽しもうと読み始めましたが、ストリーはなかば退屈、作中会話はまだるっこしくてお上品。「この作家は何を言いたいの」と投げ出しそうになりつつ、とにかく一冊につきあいました。

主人公は由緒ある貴族の館の執事。お屋敷のパーテイーや政治家たちの会議を切り盛りし、たくさんのメイドも使う立場。日本にあてはめればホテルの支配人、昔なら茶坊主の筆頭のような仕事でしょうか。

主人公が終生掲げた目標は紳士の国の「品格」。従順につかえながら、内心の葛藤も抱え込む。ナチのパリ占領のころなのか、お屋敷には敵対国ドイツの大使もやってくる。ユダヤ人のメイドを解雇することが決められ、執事は女中頭と衝突もする。あきらかに大戦の影が落ちている。しかし、執事たるもの、決して取り乱してはならない。館の主はその後、米国人に代わるが、執事は昔ながらのプライドとうずきを抱きながら、田舎を巡る感傷旅行では屋敷を去った女中頭にも会いに行く。その回想は、ドアの外からそっと室内をうかがうにも似た感触である。

英国作家を私はよく知らず、今も強く印象に残るのは「長距離ランナーの孤独」を書いたアラン・シリトーくらい。彼は 1960 年代の「怒れる若者世代」の一人で、プライドと裏腹の反抗心を、少年刑務所を舞台にくっきり描き出した。これに対し、半世紀のち登場のイシグロなる作家は異郷を旅する老境の省察型か。もっとも、EU離脱で亀裂を生んだ今の英国で彼の作品がどう読まれるか知るよしもない。

大げさかもしれないが、私は今の「祖国ニッポン」から品格も、恥の文化も、すっかり薄らいだと感じている。政治宣伝めいた「明治なつかし」の古い歌謡曲の繰り返しには何も見えない。と、すれば、この小説のごとく、記憶、体験を手掛かりに、ささやかでも「自分史」をたどる方がよほど建設的と思った。　　（投稿　2017･11･16）

熱狂の病を知るために　（2018．2）

き一太　　（狩場台）

大川周明の名を知る若者はどれほどいるでしょう。極東軍事裁判で、被告席の東条英機の頭をピシャリ叩いた奇行の人物と言った方が早いかも知れません。「大東亜戦争」を鼓舞したウルトラナショナリストとして、唯一人の民間人A級戦犯と起訴されましたが、梅毒で精神を病んでいたとみなされ、免訴となりました。

そのプロパガンダ書「日本二千六百年史」の復刻版（毎日ワンズ）がつい最近出ました。終生を宗教研究に没頭したといわれる大川は、この書で国民精神総動員に熱気を込めています。キリシタン弾圧の背景にはスペインの日本支配を恐れた秀吉の判断があったこと、幕末に各国が開国を求めてやってきたことなどなど「国難」の歴史を講談の如く語ります。

狂人扱いされた大川に関心のあった私は「いま時こんな本が売れるのか？」と思って手にしました。原本で検閲にあった部分は復元されていますが、要するに皇国神話に都合悪い部分で、戦時体制下の「忖度」ぶりがわかります。

大川は岡倉天心らをはじめとする「アジア主義」と、「日本精神」とを掲げましたが、記紀神話や教育勅語を押し付けるだけの国粋主義者とは毛色が違ったようです。思想の面から昭和史を探る評論を続けた松本健一氏（故人）は著書「大川周明」（岩波現代文庫）で、インドへの関心からキリスト教、社会主義、イスラム教へと思想遍歴を重ね、五・一五事件にも関与した大川を単純に過去の思想家とは見ていません。ただし、大川が掲げた、欧米列強からの「アジアの解放」が、実際は日本の泥靴による「侵略」であったことを否定せず、「アジア主義」の思想と現実がかけ離れる点にはクギを刺しています。

かつて、欧米に植民地化されたインド、中国、ミャンマーなどアジア諸国の独立に向け日本が先頭に立つべき、と思った若者、文化人、政治家、軍人は多かったといわれます。大川は政治力もあって、東亜経済調査局付属研究所（大川塾）を通じて語学を鍛えた青年たちを実際に南方に送り込みました。ところが、日本の勝手なアジア解放思想は戦火の拡大とともにしぼむ。その挫折は「大川周明　アジア独立の夢」（玉居子精宏著、平凡社新書）にも描かれますが、戦時にあっては軍がすべて、理想は二の次です。

「若いころ、アジアの解放を信じていた」。そう語る人物に私は会ったこともあります。が、「日本二千六百年史」において大川が「世界維新」を唱えて泥沼の日中戦争を肯定するくだりを読むと、満州事変を企て日米による東洋対西洋の「最終戦争」を不可避とした石原莞爾（彼は日蓮宗徒）と同じく、大川は幻想を肥大させた革命夢想家とみるほかありません。戦後世代からの結果論といえばそれまでですが、他国民に「日本主義」「アジアはひとつ」と押し付けたのは、「ご都合主義」に

過ぎません。被害者の側からは、白色に代わって黄色の軍国主義者に踏みにじられた、となるのが当然でしょう。

反面教師の大川が教えることは熱狂の恐ろしさです。情報統制が厳しいほど非合理主義が頭をもたげ、右向け右の「牢獄国家」に至る危険は今も大あり、いや、進行中と私は感じています。

（投稿　2018･1･16）

占領日本に三分割案があったとは　（2018．7）

き一太　　（狩場台）

新聞の訃報欄に先日、武田清子氏の名を見つけた。戦後の言論界に影響を残した人として、私は古くからその名を知っていたが、まとまった本を読んでいなかった。不勉強を恥じ、絶版になった「天皇観の相克」（岩波書店）を神戸市立図書館から借りて読んでみたが、終戦前後と占領政策をめぐる豊富なデータに改めて戦後日本の出発点へ関心がよみがえった。

私は敗戦の翌年 1946 年に生まれ、少年時代まで北海道で過ごしたので、旧ソ連による北海道上陸作戦はうすうす聞かされていた。樺太（サハリン）の北緯 50 度線が破られ、邦人たちの南への逃避行が始まったこと、電話交換業務の女性たちが集団自決したことなどは主に報道で知っていたが、高校の社会科授業などはそんなことにまったくふれていなかった。

気を新たに「天皇観の相克」を読むうち、日本の敗戦処理をめぐり、北海道は旧ソ連、本州はアメリカ、そして九州を中華民国が支配する動きがあったと知り、いささか驚いた。朝鮮半島のような分断国家実現の恐れは私のふるさと北海道だけではなかったことになる。この荒っぽい三分割統治案は旧ソ連が持ち出したものの、蒋介石はソ連の野心を警戒して中国軍の九州占領を辞退する旨をマッカーサーに伝えた、というのである。外交駆け引きの内幕は中華民国政府要人の著書に基づく。

こんな裏話を知る日本人はどれくらいいるだろう。歴史に「もしも」の疑問を持つのは慎重さを要するとしても、東西ドイツ、南北朝鮮の分断国家の歴史はよそごとですまされない気がしてくる。私なりの見方を加えれば、抗日戦と内戦に消耗した中国が日本に進駐する余力はなかったろうし、マッカーサーが占領政策の主導権をスターリンに渡すはずもない。東西冷戦の駆け引きは日本の降伏前から始まり、原爆投下はソ連けん制の意味合いも帯びていた。

「天皇観の相克」は 1945 年を時間軸に、天皇の処遇と原爆をキーワードに戦勝国内部の駆け引きと日本側の反応を読み解こうとする。現人神（あらひとがみ）信仰の「自画像」にがんじがらめ

となって破たんしたニッポンと戦勝国側それぞれの「他画像」とのせめぎあい。複雑な化学変化のような有様は日本の狭い視野を一度突き抜けた人でなければ見えてこなかっただろう。

軽いノリで歴史をもてあそぶ風潮が強まるいま、新鮮さを失わぬ研究書だと思う。

（投稿　2018・6・10）

☆　イラストは戦後ソ連がどの時期か提案したという米英中ソによる4分割統治案（編集委員　インターネットから）

いつしか消えた我が家の神棚　（2018．10）

き一太　　（狩場台）

民俗学と国文学の折口信夫は日本文化の古い地層へ案内してくれます。天皇代替わりが近づき、この夏は折口の 1945 年 8 月当時の思いを「天皇論集」（講談社文庫）から読んでみました。「神州不滅」が音を立てて崩れる中で折口は日本の精神文化の基盤を根本から考え直さなければ、と苦しんだ様子が読み取れます。

「神道の新しい方向」とした論稿で、折口は「アメリカの青年たちは十字軍における彼らの祖先の情熱をもって戦っているのではなかろうか」「日本の国に果たしてそれだけの宗教的な情熱を持った若者がいるだろうか」さらには「日本はいったい宗教的生活をする土台を持っておるか」と胸騒ぎのような思いを連ねています。皇国史観の聖典と扱われた記紀神話を「美しく壮大な文学であって、宗教としては未完成」と踏み込む。土着の宗教が世界宗教へ育つためには「数千年かけて普遍的な原理を広めてゆく必要がある」のに対し、「自分も神道界もその努力を怠っていた」と責めている。これは単なる敗戦ショックではなく、世界宗教のキリスト教と国家神道一色の日本との、いわば「文明の衝突」から生まれた痛烈な反省の弁に聞こえます。そして折口は神道立て直しを願い、「時の政治家に利用されないように」とクギを刺していました。

信心薄い私にとっての神道とは何か。サッパリ感もおごそかな感じもある。自然大好きでもあるから、山をご神体とみなしていいし、鎮守の森も神仏習合の修験道も魅力的です。けれども神道セレモニーとなると、ゲンパツの地鎮祭から結婚式、慰霊祭まで「なんでもござれ」の感じであって、原理主義と裏返しの「いい加減さ」が気になってくる。少し宗教界を観察すれば、戦後は日本基督教団や仏教界の一部から戦争協力への自己批判がおきたのに、神道界の反応はないに等しい。その理由を探せば、神道に「浄不浄」の観念はあっても「原罪」とか「罪障」のそれがないということに行き着きます。

各地で土着信仰として発展してきたる神道系諸派をひとくくりに出来ません。が、明治政府が神仏分離令で仏教を排し、マッカーサーが神道指令を発するまで、百年近くもの間、神道は国民精

神総動員の「願掛け」道具として機能した（させられた）のが実態でしょう。アマテラスの伊勢神宮と英霊をまつる靖国神社を別格に、天皇一神教とよぶべき国家神道の体制が出来上がると、邪教かどうかは当局の判断ひとつ。大本、ほんみち、創価学会の前身、キリスト教諸派などが不敬罪、治安維持法で次々弾圧された歴史の暗部がのぞきます。

天皇さまが神棚を降りられ、戦後の宗教界は「信心獲得の自由競争市場」に放り出されました。そして多くの社寺は結婚式と葬式ビジネスに棲み分け、観光、教育でもカルチャーセンター路線で成功しました。私は学問の神様の菅原道真や柿本人麻呂、商売繁盛の神さんなどは大好きですが、国家神道のニオイだけは御免こうむります。最近は神道界の一部オエラさんと右派の改憲勢力が手を結び「日本の伝統を取り戻せ」のかけ声がしきりですが、宗教的動機というより世俗の政治パワー欲しさが彼らのホンネでしょう。

気がつけば、私の生家の神棚はとっくの昔に行方不明となっていますが、それで困ったことはない。教義が残されているわけでもなく、どこの神様をまつっていたかさえ不明なんですから。

（　投稿　2018･8･31　）

久坂葉子をどう読むか　（2019．12）

き一太　　（狩場台）

「見つめられた」と感じる時がある。11 月初め、灘区の原田の森のギャラリーで写真展を見たあと、フラリ立ち寄ったのが向かいの神戸文学館のレンガの建物。こちら俳句をつくるわけではないが、永田耕衣とか赤尾兜子とか神戸ゆかりの前衛俳句の旗手に少し興味はあった。

が、俳句関連の展示は少なく、その代わり、コーナーの一角に妙に気になる女の視線があった。それが久坂葉子という早死にした作家の小さな写真だった。少し退廃的かつハイカラ、そしてなにか覚悟したような、どうも太宰治の雰囲気に近い。第一印象「いい写真だな」である。この作家は富士正晴率いる関西拠点の文芸誌VIKINGで活動して 18 歳にして芥川賞候補となり、詩、小説、演劇台本などを書き、21 歳で阪急電車に身を投げた。久坂葉子研究会というのもあるそうだが、私はまったくの新参者であり、それもリハビリで長生きして少し恥ずかしい。

せっかくの読書の秋だから、久坂の短編集「幾度目かの最期」（講談社）を取り寄せた。文章は激しい告白調で日常身辺が語られる。その対象は家族であり、あこがれ抱いた男の残像であり、規則でがんじがらめの戦時下の学校であり、見慣れた町の風景である。

作者は川崎造船所創設者の子孫であり、カネに苦労したわけでもなさそうな、ええとこのお嬢さんだった。音楽にも精を出し、「天才文学少女」とも評された。それはひとまずおいて、短編集一

冊を読み終えた私の印象は「暗い時代の激しいこころの陰影を刻んだ作家」と、くくるほかない。軍事教練の続く学校や父親への反発も随所に噴き出す。つまるところ、自由な空気が吸えない、自己欺瞞を装うには耐えられない、強烈な違和感が作品のバネだろう。マネキンとデザイナーの対話形式の戯曲「鋏と布と型」はちっぽけな人間の「頭でっかちぶり」をからかうが、これは「生きるに値するか否か」の自虐的作品に読めた。

この作家を同時代の誰と比べたらよいだろう。文壇の評価とか、ストーリーづくりのよしあしとかのモノサシはどうでもよい。で、私は茨木のり子を思い出した。この詩人は戦時下で抑圧された若き感性を、あたかも冷蔵庫に保管していたごとく、「倚りかからず」などの作品に結実させた。戦後社会も今も引きずる旧態然の同調圧力、つまりは世間体に対する拒否感があった。たちまち走り去った久坂の世界も戦時という背景抜きには理解しにくい。短編中の神戸空襲で家を焼かれたことや、骨董品を売って食いつないだ記述にもそれは明らか。戦争ロスジェネ世代のナマの声を聞くにはオススメの本である。　　（　投稿　2019・11・20　）

政治家に人望は不要でしょうか　―「女帝」を読んで

（2020．7）

き一太　　（狩場台）

「京都大学の仏法科で２番目の成績」という経歴の政治家がいたそうです。仏法とは仏教ではなく、フランス法学。日本民法は慣習法重視の法体系より成文のフランス法の影響が強いのです。そこで秀才ぶりを発揮したのは石川県選出の益谷秀次という元衆院議長（1888～1973）です。この話にはウラがあり、当時のクラスには学生がたった2人だそうです。つまりはビリ。ある統計学の先生が「数字にごまかされてはダメ」と私に教えてくれた一例です。

数字より難しそうなのは政治家の「物語」の真偽。小池百合子・東京都知事の華麗なる経歴の核心「カイロ大学を首席で卒業」はどうでしょうか。その疑惑と素顔に迫った長編ノンフィクション「女帝小池百合子」（石井妙子著・文藝春秋）が出たばかりで、反響は大きいようです。

都議会で受けて立った小池氏は「その本を読んでいません」と受け流しましたが、すかさずカイロ大学からエジプト大使館を通じて「確かに卒業」と異例のメッセージがあり、一方で東京地検には虚偽経歴記載による公職選挙法違反容疑の告発状が出されています。

イメージ先行の劇場型政治家は苦手な私ですが、あえて「女帝」を読みました。著者がよりどころとする、エジプトで同居していた小池氏の学友をはじめ、関係する証言者は匿名が多く、割り引いて読むことも心がけました。しかし、シラミつぶしのごとき裏付け取材は綿密であり、全体としての私の印象は「書かれた側がしっかり反論できなければ逆に不利」と思えました。

「小池サンは落第して進級できなかった」との知人の証言をはじめ、忙しくて偶然にも飛行機に乗り遅れること2回、その2便はいずれも墜落したという小池氏の強運エピソードもホラかハッタリかと疑いたくなります。それは、過剰包装のお菓子の中身がまずくなってゆく感覚に近い。

ストンと納得できる部分も多かった。政治好きであるとともに借金取りに追われた小池氏の父親は石油ビジネスでカイロに渡り、某政界フィクサーに頼ってファミリーで日本料理店を開いた。小池氏がテレビキャスターの座を得た後に飛ぶ鳥を落とす勢いで細川、小沢、小泉、安倍、二階氏ら政界実力者へ接近と離反を繰り返したこと。苦労と努力を重ねたお嬢さんのイメージは「初の女性首相候補」まで増幅される。

小池氏の造語能力は「クールビズ」「ユリノミクス」「東京アラート」とふんわりムードはある。けれど、政治家として何を目指すか芯のようなものがイナカ者の私には見えませんでした。それでも東京都議選では自民党を圧倒し「都民ファーストの会」を与党第一党に押し上げ、オトモダチの前原誠司に至っては小池氏を頼って旧民進党をぶっ壊す大醜態を演じたのは周知の通り。

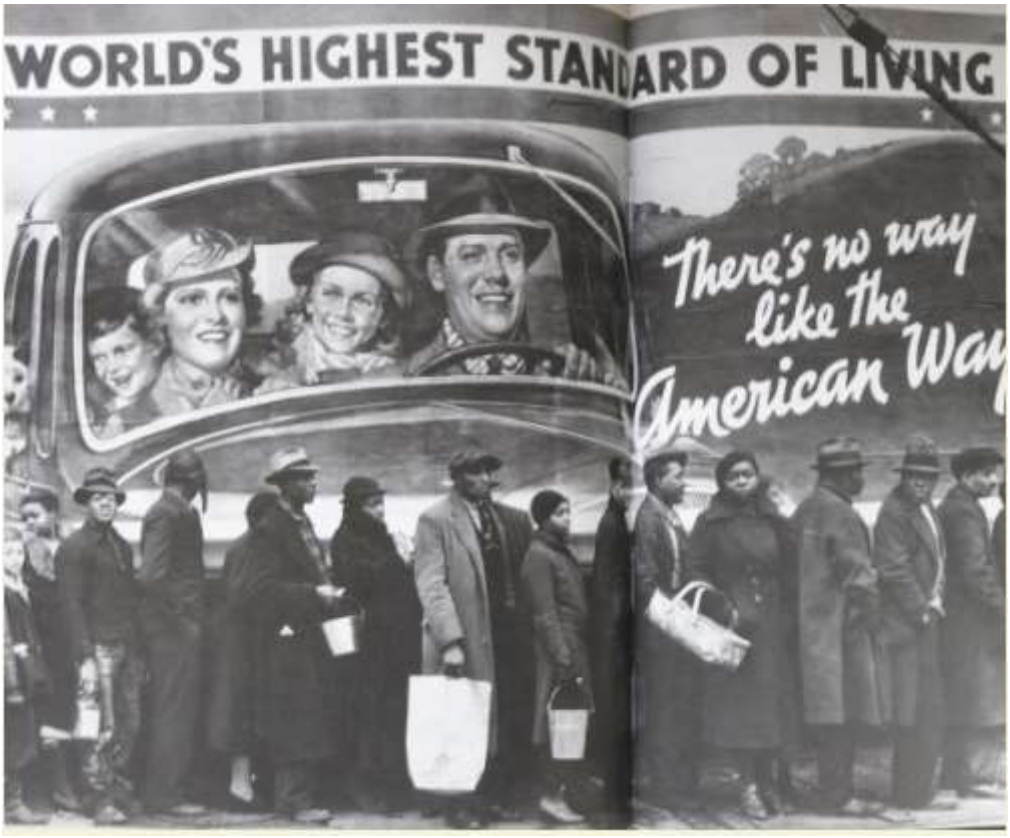
実は私は小池氏がわずか2か月ほどで防衛大臣をやめた裏側も知りたくてこの本を求めたのですが、「防衛省の天皇」と呼ばれ、後に汚職で逮捕、有罪とされた守屋武昌元次官は小池氏のマイナスイメージを語るのみ。私は小池氏が守屋氏をクビにしたのは自分の監督責任を免れるために先手を打った、あるいは防衛省の闇の深さを知って嫌気がさしたのか興味があったのですが、そのへんは書かれていません。とにかく小池氏の上昇志向はケタはずれに強く、役に立ちそうにない人物は最初から相手にしないようです。

話を戻せば、「カイロ大学首席で卒業」疑惑はそのまま疑惑として残るかもしれないが、冒頭の「京大仏法科2位」の笑い話と同列にはできません。この本が示唆するところは結局、政治以前の「人望とは何か」というごく当たり前の問いに落ち着くと思うのです。

（　投稿　2020・6・11　）

恐慌の 1930 年代を視る（2020．8）

き一太　　（狩場台）



コロナ禍が引き起こす「世界恐慌以来」の先行き不安が語られると、否応なく 1930 年代へと関心が向かいます。

1929 年のウオール街の株暴落に始まった世界恐慌について私は実感を持ちようありませんが、中学の先生が「アメリカの失業者は4人に 1 人」と教えてくれたことは覚えています。

その時代へアプローチするよい手がかりは写真です。つい最近、米国の女性報道写真家 M・バークホワイトの足取りを追った中古本（Abrams 社版）を入手したところ、食料配給を待つ人々とアメリカの夢を語る大看板を組み合わせた作品がありました。下に並ぶ列に黒人が多く、上の大看板は幸福そうな家族のドライブの絵。宣伝文句に「世界最高の生活水準」「アメリカ以外の道はない」とある。ニューディール政策を通じて不況脱出に向かうころの光景と思われますが、時代の断層が鮮やかです。

撮影は 1937 年。その前年、日本も恐慌の波に洗われ、二・二六事件が起きた。一方でアメリカは圧倒的な工業生産力をつけ、対ナチス、ヨーロッパ戦線への参加へ向け議会は武器貸与法を 1941 年に成立させる。この武器貸与法成立の動きを報じようとした朝日新聞特派員の森恭三は

上司に原稿を握りつぶされた怒りを戦後の回想録に残しています。「理由なくボツにされることには抵抗しよう」と。

雑誌「ライフ」などで活躍したバークホワイトはフォトジャーナリズム史上の伝説的人物で、土門拳が高く評価しています。東京の富士フィルムスクエアで私が初めてそのプリント 10 点ほどを見た時、構図の巧みさとともに、厳しさのなかに気品を感じさせる作風が印象に残りました。スターリンやガンジーの肖像のほかに、パリ解放後に、ドイツ人との間に子をもうけたフランスの女性がみせしめに頭を丸刈りにされた作品もあった。花火と見まがう夜の写真はドイツ軍の空襲を受けて浮かび上がるクレムリンのシルエット。恐慌と戦争の時代に世界を駆け抜けた行動力に圧倒されます。

失業率が高まるのは不気味です。世界人口は 1930 年代の倍をはるかに超え、いま、グローバリズムの風船が一気にしぼむように負の連鎖が強まっています。写真は大きな問いを突き付けるようです。　　（　投稿　2020･7･17　）

「財政赤字の神話」の驚き　（2021．7）

き一太　　（狩場台）

国家財政は簡単に破綻しない、いや赤字財政の火の車で将来の大増税は避けられない。この両極端な見方がコロナ禍の最中に交錯しているように思えます。その出口はどうなるか占い師に聞きたいのですが、ど素人の私にもまったくヒントがないわけでもない。

その手掛かりになる一冊が NY 州立大ケルトン教授の「財政赤字の神話」（早川書房）でしょうか。ケルトン教授は去年来日した際の講演の様子がネットでも紹介され、党派を問わず反緊縮論者らが MMT（現代貨幣論）とともに大いに持ち上げた経緯があります。

米国民主党左派のアドバイザーでもある著者の語り口は平易で宣伝臭もありません。その要点を挙げれば、通貨を発行できる国（通貨主権国家）は悪性インフレを回避しながら財政拡大できる、家計を国家財政に例えるのは間違いで財政赤字と民間の黒字は表裏一体の関係にある。税収からではなく支出の必要性から予算編成を考えてよい、となる。

このような「逆転の発想」に接すると「財源はどうする」と半信半疑になるでしょう。ところがサッチャーもレーガンも、オバマ大統領も日本の財務官僚も、この数十年「財政赤字は悪」の神話にとらわれ過ぎていたとし、神話の正体を暴いてゆくのです。

MMT 論者は「カネをつくれるのは政府だけ」という事実から出発し、中央銀行と政府の関係についても夫婦間のカネの貸し借りのようにみなす。バケツの図を使ったそのモデルについてケルトン教授は、音楽家で経済学者である英国のゴドリーなる人物から影響を受けたという。「すべての支出には出所と行き先がある」。これが発想の原点であり、政府部門の赤字イコール非政府部門の黒字という公式が導かれる。その当事者は「通貨発行者」たる国と「通貨利用者」の関係であり、会計処理では赤字と黒字の均衡が成り立つ。成長にとって財政赤字はむしろ必然であり、新たな理論というより事実の見方だという。一方でケルトン教授は「MMT は宗教ではない」と念を押す。魔法の ATM ではないらしい。

それでもホンマかいなとの疑問は消えにくい。国債残高は単なる過去の支出記録であるにせよ、「赤字」より「黒字」の語感は心理的に心地よく、どの国のリーダーも「積極財政で赤字を」と言いにくい。しかし、この本の第一章「家計と比べない」を読むと多くの読者は驚くのではないか。「赤字」を誤って解釈するとスガ政権の「自助ファースト」の礼賛、ビンボーやむなしになりかねなませんが、ここで急ブレーキがかけられるのです。

積極財政か緊縮か、小さな政府か大きな政府かは歴史的に繰り返し問われてきた命題です。「先進国で突出する日本の財政赤字」と言われると不気味ですが、実際に返せるはずも、その必要もないと当の財務官僚も知っているはずです。なぜなら過去に海外格付け会社が日本国債の格下げ評価をした際に真っ向から「破綻しない」と反論したのは当の財務省でもあるからです。国内向けにケチを装うのは財政法の掲げる乱費いましめをタテマエにするからでしょう。ダブルスタンダードですね。

この本と並行して私は「世界大恐慌―1929 年に何が起こったか」（秋元栄一・講談社学術文庫）を読んでみました。この歴史研究では、赤字財政を恐れたルーズベルトが後に積極財政に転じた過程もわかります。コロナ禍のニッポン立ち直りに向けて積極財政は避けられません。低成長下での税制のゆがみが顕在化し、格差拡大が深刻化した背景もあります。一番怖いのは戦争直後のハイパーインフレのようなカネ無価値の事態です。そうなればいまの長期デフレ状態の比ではないニッポン沈没となるでしょう。　　（　投稿　2021・6・20　）

ネットで観れる「表現の不自由展」（2021.8）

き一太（狩場台）

「表現の不自由展」と銘打った 2019 愛知トリエンナーレの催しは愛知県知事に対するニセリコール大量署名という恐るべき事件を引き起こした。その後の有志による大阪府下での「続・不自由展」の開催は法廷の争いに持ち込まれ、開催を渋る府施設の側に展示拒否の理由はないとの最高

裁判断が出された。公的な場でやみくもに表現の自由が侵されてはならないとの明確な指針の下、わずか 3 日間の大阪展は7月 18 日に終わった。

この件に当初から関心のあった私は愛知の開催に放火テロ予告があったさなか、吉村知事が「愛知県知事は辞職に値する」と記者会見で公言したことに驚き、いくつかの質問を返信封筒とともに大阪府の広報に送ったが、一年以上たっても音沙汰なし。どれほど彼が慰安婦像を嫌うにせよ、ほかの作品もふくめていきなり「見せるな」「辞職せよ」は度を過ぎた八つ当たりであり、よその県民に失礼との思いは今も変わらない。

ニセリコール署名に関与した愛知の人物は維新とつながり、事件が明るみに出るや、離党手続で渦中の人物と維新の表向きの関係は断たれた。それでも維新の議員や首長による昨今のスキャンダル続出には首をかしげざるを得ない。

「表現の不自由展」を考える前段に、戦時プロパガンダの罪を封印し続けたこの国の戦後史も忘れてはならないと思う。ナチスのバウハウス弾圧や現代絵画をめぐるフルシチョフのロバの尻尾論争、さらに戦前日本の超現実主義運動への特高警察の弾圧も過去のことにできないはずだ。

不自由展に関してやり玉にあげられた作品群のひとつ、昭和天皇にかんする版画「遠近を抱えて」シリーズを私は 30 年も前に見た。しかし、そのコラージュ技法が特に印象に残ったわけではない。美術批評家だった針生一郎氏の言葉を借りれば昭和天皇に対して「空虚な礼賛と愚劣な否定」が同居したのも戦後であり、昭和天皇への距離感を表現するのは今であっても難しいと思う。単純に比較すれば、ゲオルグ・グロスの反ナチ風刺画の方がはるかに明快である。

皮肉なことだが、騒ぎですっかり有名になった天皇版画シリーズは会場に行かずとも「不自由展」で検索すればネットで閲覧できるし、一連の事件に関心のある方にはお勧めする。見ないことには始まらない。

（参考まで、右上写真（拡大）は大浦信行氏の天皇版画作品「遠近を抱えて」シリーズのひとつ

投稿　2021･7･19　）

ゲンパツなき「聖域」紀伊半島（2016．12）

き一太　　（狩場台）

健康づくりと写真の趣味を兼ねて私は山をハイキングする。風景を楽しみ、風景の先に何があるか想像をめぐらせたり、思い出にふけったりする。

この秋は琵琶湖西岸の「花の山」赤坂山と紀伊半島の展望台の大台ケ原を回った。湖西には「ゲンパツ銀座」の若狭湾から関西電力の送電線が延びている。これを見て、気が重くなった。琵琶湖が原発事故で汚染される恐れを空想だなどと、言っておれないからだ。

一方の紀伊半島。こちらはいまだ一基も原発がない、日本では珍しい「聖域」である。大台ケ原からは夜明けの太平洋の海岸線が、三重県の尾鷲から和歌山県の新宮方面まで見え、スケールが大きい。

紀伊半島の原発計画は、原発のバラ色宣伝が本格化した 1960 年代にまでさかのぼるが、中曽根元首相（当時は科技庁長官）ら視察団は中部電力の原発候補地である三重県の芦浜で漁民の反対デモに追い返されたことが知られている。住民運動の歴史をひもとけば「熊野海戦」という表現も誇張ではない。

また、私が実際に住んだ和歌山の海岸線では、製材所をつくるとか、公園を整備するなどの名目で、怪しげな土地転売や訴訟が起き、日高町などなんと5カ所もの原発候補地が浮上した。美しい海岸線の集落で関電立地部が地元工作を続け、巨額のカネの話がちらついた。結局、三重でも和歌山でも原発計画は死にもの狂いの住民パワーにはね返された。

いま、はっきり言えることがひとつ。原発依存を突出させた関電が紀伊半島を侵していたならば、フクシマの事故以降、その経営はますます苦しく、今期は黒字どころか大赤字になっていただろう。重厚長大産業のかげりとともに電力需要は伸び悩み、省エネが進んだ。皮肉にも、原発反対運動に電力会社は救われたと私は見ている。

廃炉の時代へ、天井知らずのツケが国民に回されようとしている。通信事業とセットで家庭用電力自由化も始まったが、これが原発ありきの前提でわかりにくい。私は原発の電気だけは買わないようにした。新幹線の禁煙車両が増えたように、原発以外の電源が増えることを願っている。

（写真は朝の熊野灘方面）　（2016. 11. 20）

東芝の危機の意味するもの（2017．3）

き一太　　（狩場台）

モーター、電球、電気釜、パソコン。もの心ついたころから私の身の回りには「TOSHIBA」のブランドが常にあった。それがいま、海外での原発事業の損失から債務超過、会社存立の瀬戸際にあるという。新聞各紙の経済面を拾い読みするだけで、東芝は原発とともに衰退か、と思うとなんともさびしい。

もう20年以上も前のことだが、思い当たるフシがある。かつてスリーマイル、チェルノブイリと世界を揺るがす原発事故が続き、米国のGE（ジェネラル・エレクトリック）は原発から手を引くとの記事を原子力情報誌で知った。原発先細りの前触れだった。

もうからないとみれば、さっさと手を引く。それがドライな米国流と当時は妙に感心したものだが、GEは後に日立と組み、東芝はやはり原子炉メーカーのWH（ウエスチングハウス）を子会社としている。

ところがいま、東芝の原発事業の損失は7000億円と報道される。この数字がどこまで膨らむか予断を許さない。世界市場で原発を売り込むバラ色の夢が一周遅れての悪夢。当たり前のことだが、安全性を高めれば原発建設コストは上昇する。米国ではシェールガスが伸びてきた背景もあるだろう。

とにもかくにもゲンパツでもうける時代は去った。おそらく原子力産業界に合理化、再編の動きが出るだろう。また、日立、東芝に三菱を加えた3社を後押しするようにアベ政権はフクシマ事故などなかったかのごとく原発輸出を奨励しているが、これは一周どころか二周遅れの愚策に見える。「日本ブランド」の信頼を損ねないか。

火の車の東芝は原子力部門に大ナタを振るわないと生き残れない。将来、もしかすると「廃炉技術の東芝」の看板を掲げるかも知れないが、いまの私にとっては愛用の大型パソコンの方が大切だ。年配者向けに画面は大きく、スピーカーの音質よく、おまけにユーザーへのサポートが親切。これら家電部門が次々と切り売りされてはたまらない。（2017・2・4）（投稿）

皇室は永遠の金のオリでしょうか（2017．6）

き一太　　（狩場台）

いまの憲法に最初に出てくる象徴としての天皇の地位。そのありようは9条と同じく議論百出の国民的課題となるのでしょうが、わが権力者アベシンゾーは天皇の退位を今回だけの特例にし、女性宮家創設などの諸課題は後回しにするという姿勢がはっきりしてきました。一民間団体にすぎない日本会議のサクライヨシコらオトモダチ宣伝屋を政府の「有識者会議」に送り込み、宮内庁や広汎な国民世論をけん制しているように見えます。天皇代替わりに向け、皇室報道の出所と政権の思惑を注意深く見てゆく必要があるでしょう。

私は読売新聞の定期購読者ではありませんが、時に一部買いしたり、図書館での読み比べでマスコミの風向きを調べます。5月3日の憲法記念日にはなんとアベシンゾーの「オリンピックを契機に憲法改正を」と一面デカデカ、まるで政党機関紙のごとき宣伝インタビューがのりました。このメディアに多角的な視点を期待する方が無理と割り切ってはいたのですが、それはさておき、私の関心をひいたのは、皇室とアベの関係をさぐる同紙の別の記事。日本会議に名を連ねた右派論壇の長老格？上智大の渡辺昇一氏（故人）にアベはかねてから傾倒し、通夜の席にもまいったとありました。なるほどと思います。万世一系の天皇様の最大の仕事は国民のために「祈ること」なのだから、生前退位も女性宮家も認めたくないというアベの姿勢はこの日本会議の受け売り、もしくはズブズブの関係に基づくのでしょう。どんな記事も反語的に読めばそれなりに参考になります。読売新聞には今後、森友学園問題でマスコミから逃げ回るアベアキエ氏に、それこそ「渾身のインタビュー」で真相解明に迫ってほしいものです。

次に天皇様が退位の意向を示された去年8月のNHK報道。これはいささか驚くスクープでしたが、それまでNHKモミイ前会長のアベ政権への忖度ぶりを考えれば「この報道もアベ政権フィルターにかかったのか」と私は一瞬考えた。しかし、ことは単純ではない。その後、いろんな報道を突き合わせると、宮内庁とアベ官邸にはうかがいしれないミゾがあり、相当のかけひきもあったらしい。NHKはアベに遠慮せず、少しはメディアの独自性を貫いたのでは、思うようになった。

この推論を裏付けるような報道が今度は5月 21 日付毎日新聞に読み取ることができた。これまた一面デカデカ。政府の有識者会議で「天皇の仕事は祈ること」という話が先行したことに対し、天皇様が近い人たちに「祈ることだけを優先するような議論に落胆した」と胸のうちを語ったというのである。深読みかもしれないが、私には、さびしさ、無念の思いが伝わります。

断片的ながら、この読売、NHK、毎日の報道からどんなことが考えられるか。美智子様が民間から皇室入りしたのは、戦後日本の精神的革命のようなものだと私は位置づけている。私は中学

生でしたが、当時はミッチーブームについて「美智子様は永遠に金のオリの中に入られるのか」という趣旨の報道があったことを思い出す。

改憲にオリンピックを持ち出すアベとオトモダチ宣伝屋たちは皇室典範をいじらず「金のオリ」の入居条件を永遠に変えない方が政治日程のうえで戦略的に有利とみているのでしょう。しかし、オリに入られるのは、まぎれもなく歴史の荒波を生きてきた生身の人。時代とともにあるべき皇室の姿が、政権のご都合主義で簡単に決められてよいはずはありません。

（2017・5・23）（投稿）

「希望」と「幸福」どこか似ている　（2017．10）

き一太　　（狩場台）

小池都知事が代表になるのは「希望の党」と聞いて、何やら新興宗教めいた党名と感じた。連想したのは「幸福実現党」だ。「幸福」と「希望」をごっちゃにして戸惑う私のような有権者も出てこよう。

「希望」の面々からすれば、飛ぶ鳥も落とす勢いの小池ブームと「幸福」を同列に見られたら迷惑であるかも知れない。しかし、過去の国政選挙で候補者をたくさん並べ、ポスターをはりめぐらせた点で「幸福」に知名度はある。

おそらく小池都知事はかつて「クールビズ」という宣伝文句を流行らせた自信があって、「希望」も素直なフイーリングで受け止められるとみたのだろう。「ファースト」は都知事選ですでに消費したCMだ。小池氏の使用人のごとく新党設立に走り回った若狭氏や細野氏も「希望」の大合唱を巻き起こそうということだろう。

しかし、キャッチフレーズだけの選挙はつまらない。小池知事のいう「しがらみのない政治」というのも、中身が不明。東京都議会のファーストの会の代表も小池氏ら数人の意向で決まったらしく、組織の意思決定がどうなっているのかもわからない。

小池ブームは、東京都知事選を境にピークは過ぎたのではないか。余勢で国会に数十人を送り出す可能性なきにしもあらずだが、新党はかつての「みんなの党」のように、さまよって消えてしまう可能性もありだ。自民党OBの山崎拓氏はある新聞紙上で「小池都知事は日本でメルケルの地位を目指している」と語っていたが、どうだろう。

わずかに私の関心を引くのは「脱原発」を掲げる小泉元首相の小池氏への影響力だ。新党が本気になって公約として取り組むか、それとも票集めに言葉だけの「脱原発」か、そのあたりから「小池国政」の正体を見極める必要がある。　　（投稿　2017.9.25）

だれが船を沈没させたのか（2017．11）

き一太　　（狩場台）

まるで有権者をバカにした支離滅裂の芝居でした。マエハラ氏とコイケ氏による今回衆院選への対応です。ますますアベを高笑いさせた主役はまず、この二人でしょう。テレビを見るのもイヤになりますが、私の乏しい体験からマエハラ氏とはどんな人物なのか、改めて考えてみる必要があると思います。

私が京都に住んだのは四半世紀も前、わずか2年ほどです。マエハラ氏が初めて京都府議会選挙に出てちょっと話題になっていました。地元では「早い時期から街頭演説に熱心にやっている」「なかなかの苦労人」「バックについているのはワコールのツカモト氏」などとささやかれていました。

たしか 20 歳台の新人府議でしたから、そうメディアにとりあげられたわけではなく、「この人物はいずれ自民党から国政に出るのか」くらいの印象しか私にはなかった。日米安保のような課題で国民を二分すべきではない、と現状維持の立場は一貫していた。

かつての京都は共産党が府政与党を担う時期が長く、アンチ東京の感覚も強かった。なにしろ保守系の知事も「京都は西の文化首都」などというプライド高きお土地柄。政界通によると「日本共産党がなくなっても京都の共産党はなくならない」という。私の解釈では、その強さとは、小難しい社会主義の理屈などとは関係なく、「町衆共産党」とでもいうべき庶民感覚と計算高さの化合物と思われた。

マエハラ氏の共産党アレルギーは京都の政治風土の中でしみついたものでしょう。しかし、彼の言う「共産党シロアリ論」を全国にあてはめれば、オール野党共闘など望むべくもない。旧社会党が強かった北海道や東北、土着の社会大衆党以来の歴史を重ねたオール沖縄。これらの地域でマエハラ氏が影響力を持つとは私には最初から考えられなかった。

マエハラ氏に限らず、松下政経塾の出身者は政治エリート意識が強い反面、頭でっかちで、開拓精神に欠けるというのは私の偏見だろうか。どこか庶民の空気感と離れている。 二度も民主党代表を経験したマエハラ氏は、アメリカのサンダースに見習うこともできず、コイケ人気にすがりつき、多少とも浮力のあった民主党の全財産を放り出した。船長が真っ先に船から逃げ出したのと同じ。ならば「本人ケロリ、周囲あ然」のお笑いではないか。　　（投稿　2017.10.24）

リニアは「退歩」の象徴である　（2018．1）

き一太　　（狩場台）

「リニア新幹線を走らせようと思えば原発がますます必要になる」。こんな警告の意見が新聞に載ったのは、列島改造の余韻が残る数十年前。いまだ気になり、岩波ブックレット「リニア新幹線が不可能な7つの理由」（樫田秀樹著）を読んでいた矢先、リニア工事入札不正疑惑で東京地検がゼネコンを捜索したとのニュースが飛び込んできました。

9兆円もの巨大プロジェクトに蠢く暗部は徹底的に究明されるべきですが、狭い国土にリニアはふさわしいか、改めて議論が広がってほしいと思います。

私は、低エネルギー社会を願う立場から、リニアは文明の「退歩」の象徴であり、財政投融資3兆円を一民間企業のJR東海に貸し付けるのは、国民経済にも総合交通体系の整備にも貢献しないとみています。

第一にJR東日本は当初「建設資金は自前で」としていたのに、いつの間にか国民の税金投入の後押しプロジェクトに格上げされた経緯が不明。公明党出身の国交相はどう判断したのか。

第二に磁気浮上式というエネルギー多消費型の交通システムは省エネ時代の要請に逆行する。速度を倍加するためには二乗、三乗倍の燃料を食うと専門家の指摘はかねてから出されていた。

第三に東京、名古屋、大阪の三都だけ、ほとんどトンネル部分を時速 500 キロで結んでも地方はさっぱり恩恵を受けない。赤字の鉄路を抱える地方はむしろ切り捨てられる。

そのほか、膨大な残土の捨て場がない、水源が枯れる、事故の際の地下深部からの脱出方法や磁気による人体への影響などなど、懸念材料が山ほどある。

強引なプロジェクトに対し、孤立無援の住民、地権者たちが情報公開を求めてJR東海を相手に訴訟を起こしているのにマスコミは冷淡。ブックレットはそれにもふれている。

これとは別に、あるエコノミストが雑誌でリニアを「世紀の愚策」と評したことも思い出す。JR東海が単独でリニアに集中投資すれば、現行新幹線の儲けも吹っ飛びかねないと試算し、旧国鉄債務の悪夢再来を示唆したのです。

「スピードだけ」には進歩も幸福もない。ローマクラブの発表した「成長の限界」が世界的な環境意識の高まりを招いたのは半世紀も前でした。ところが、ゲンパツ再稼働を進める権力者アベシンゾーは、子どもじみたスピード神話にかぶれているフシがある。米国輸出を夢みてか、アベがニコニコ顔でケネディ元駐日大使とともにリニアに試乗したテレビ報道を見て私はぞっとした。

聡明なる国民は未来に目を向け、「科学者と軍人は常に新しいオモチャを持ちたがる」との警句をかみしめた方がいいのではないか。国土はすっかり病んでいる。　（投稿　2017.12.10）

沖縄発「虚報」に見えたもの（2018．3）

き一太　　（狩場台）

フェイクニュースということが指摘されます。デマでも何でもしゃべりまくれとばかり、怪しい情報を流す。百回か千回か「ウソも繰り返せば真実」と言った元祖はナチスの宣伝相ゲッペルスだそうですが、その時代が忍び寄る雰囲気が流れています。つい最近あった産経新聞による沖縄メディアを中傷した「虚報」についてもその背景を見る必要があると思います。

これは昨年 12 月 12 日付け産経新聞（大阪発行分は総合3面）の署名入り記事で、内容は同月1日に起きた沖縄自動車道の事故に関し「ケガをした米兵は勇敢にも日本人を救出してからはねられて大けがをした。それなのに米軍を悪とする地元メディア2紙はこれを黙殺した」と非難し、ネット配信ではさらに「黙殺するのは日本人として恥ずかしい」と追い打ちをかけました。これに対し琉球新報は「米兵が救出したとは、米軍も警察も確認していない。産経新聞こそ不確実な情報を流していないか胸に手を当てて考えよ」と切り返し、沖縄タイムスも同じ姿勢を示しています。

記事の骨格をなす「救出の美談」はあったのか、後追いした毎日も朝日も未確認としましたが、当事者の産経新聞は今年 2 月 8 日付で「事実確認を怠った」として記事削除とお詫びと検証記事を出しました。ネット上では早くから大騒ぎの様相だったので、私も調べていた最中でした。

事実誤認やウソの事例はどこのメディアにもあります。が、私が注目したのは、コトの真偽以上に「日本人として恥ずかしい」との決めつけ表現でした。筆者個人の「私として」ならまだしも「日本人全体として」のニュアンスが濃く、どうも報道の職にある者の言語感覚とは思えない。取材のイロハよりも憎悪感情が先立つのか、戦時中の「非国民」呼ばわりに似たキナ臭さも漂ってくる。

ほかの商業メディアと異なり、産経新聞は「不偏不党」とか「是々非々」の方針はないようで、編集幹部は「国難を救うのはアベ首相だけ」と紙面でホメ讃えています。その評価は読者次第でしょうが、一方で自社の論調と違う同業他社のアラ探しに異様なまでに熱を上げる姿勢は独善的でまったく感心できない。よそ様をダシに売り込む限りは結局「コバンザメ商法」の域を出ず、自らを貶める危険も併せ持つ。そうであるならば「人のフンドシを借りる相撲」はほどほどにする節度があってしかるべきだ。

ネットであれ、紙媒体であれ、ニュース消費者の眼は厳しい。あの映画の都ハリウッドには「下品な映画大賞」もあるそうだから、新聞普及率の高い日本で「下品ニュース大賞」が設けられても不思議ではない。　　（　投稿　2018･2･10　）

魔女狩り報道は忘れない（2018．4）

き一太　　（狩場台）

加計学園の獣医学部新設を批判した前川元文科省事務次官への攻撃がやまないようです。一民間人になった前川氏が名古屋市の中学校で講演した際に、自民党文教族の国会議員二人が文科省を通じて事細かに学校側に報告を求めてマスコミや地元教育委員会などから「国政の教育介入」と批判を浴びたのはご存じの通り。

役人をアゴで使い、一民間人となった官僚OBをしつこく監視させるやり方はストーカーか、秘密工作員のマネごとを楽しむ連中がすることでしょう。

この件で見過ごせないのは、文科省から市教委への質問文書の中に「前川氏の出会い系バー通い」の文言が入っていたことです。この報道は昨年5月の読売新聞の一面にあったもので、当時「四流週刊誌以下」「何とも奇妙な報道」と話題を呼んだいわくつきのものでした。

夜間中学に関心ある前川氏がネオン街で接客業あたる女性らから話を聞いていたことは事実らしい。ところが読売報道は前川氏が立ち入ったと報じただけで、だれか被害者がいたのか、前川氏がなにをどうしたのか、すべて不明。この記事を読むなら、少し肩書のある人間がネオン街に立ち寄れば、たちまち「うさんくさい人」のレッテルを貼られてしまう。ところが読売の社会部長は「地位ある者の行動を伝えるのは当然」と記事の正当性を主張したのだからたまらない。これは自己弁護にすり替えた卑劣な魔女狩り報道とみるほかなく、私は「この記事をすべてのマスコミ志望の学生に読ませるべきだ」と読者の窓口を通じて抗議したことを覚えている。

さすがに読売の現役記者からも「編集段階でしかるべき社内のチェックを踏んでいない」と疑問を投げかける論考が月刊誌に寄せられ、OBの一人は「私が現役の頃ならたちまちボツにされただろう」とネット上で表明していた。

思い起こせば、半世紀近く前の「オールド読売」には黒田清ら大阪を拠点に野武士のような面々がいた。推理作家の佐野洋も詩人の中桐雅夫も大岡信も読売出身だ。特に中桐の詩集「会社の人事」はよき庶民感覚が魅力で私は愛読した。もっとも詩人にとって「会社の看板」なんてバカバカしくもあったろう。

時を経ていまの読売には、事件報道の強みも、個性輝く記事も希薄だ。編集トップはアベシンゾー氏と気が合うからか、政権擁護の論説が目立ち、森友学園報道では最初から他紙に遅れてドンジリを走る。

「発行部数世界一」を自慢するこのメディアはいったいどこを向いているのか。少なくともBBC日本語版やガーディアンなどに目を通す方がマシ。ネットを通じて「日本の見られ方」が参考になるからだ。　（　投稿　2018･3･27　）

保守再生の芽は残るか　（2018．9）

き一太　　（狩場台）

筋肉コチコチの自民党は柔らかさを取り戻すか。「自民党的大衆の一人」として私は総裁選挙に関心を持ちます。総裁任期を3期連続まで延長するよう党則を変えた時点でアベ3選お決まりみたいな雰囲気先行ですが、「草の根党員」の意識はどうなのか。開かれた政権党ならアメリカの大統領候補指名のような白熱の公開討論があって当然と思う。

総裁選で安倍氏は国会議員票（405 票）の7割を固め、石破氏が地方票（405 票）でどれだけ健闘するか、とマスコミは同じように見ています。プロ野球のひいき目予想みたいで恐縮ですが、私は石破氏が4割を獲得すれば大健闘とみています。

私の通信簿では、アベ政権は5年の長期にわたるのに、拉致問題をはじめ自主外交の成果いまだゼロ。効き目不良のアベノミクスに「カジノ特効薬」を加味し、モリカケ問題ではご夫婦ともども、愛国商法のほめ殺し作戦にコロリ。ニホンカイギなるファンクラブやオトモダチへやたら気を使い、一方で、公正であるべき霞が関の役人モラルを捻じ曲げました。アンポ法制は法制局長官のクビすげ替えから始めたことを忘れてはなりません。もはや党の伝統も危うく、改憲にいたっては「読売新聞を読め」とほかの新聞購読者をバカにする見識の低さ。立法も行政も混同するところにアベ政治が招いた保守クライシスの根源があります。

ある共産党国会議員が皮肉交じりに言った「自民党って自分党」の指摘はホントです。公明党や共産党と組織原理が異なる自民党は個人後援会を基盤とするピラミッドですから、本来は下からの草の根党員たちによる切磋琢磨が活力の源泉であるはずです。しかし、いつの間にかトップダウン型の性格を強めました。ポピュリズム、国民的人気。それを目指すこと自体に良し悪しはありませんが、たとえ党内抗争にみえても党内論議なしでは保守の多様性の理念、包容力は色あせ、ニッポン国の羅針盤は相変わらず霧の中です。

「保守本流」を自認していた旧宏池会一族に元気がなく、岸田元外相はさっさと総裁選レースを下りました。かつて中曽根首相ににじり寄って政権の座についた宮沢氏を思い起こしますが、岸田氏は「やる気」を疑われた気配が濃厚。岸田派相談役の古賀誠氏は誠実な護憲論者であるだけにもったいないですね。

異論自粛が強まれば、自民党はエネルギーをなくした「冬の蓑虫」のごときです。愛媛選出の村上誠一郎氏は堂々とアベ政治へ異論を唱え続けていますが、いまや貴重な保守の論客でしょう。はるか昔に戻れば、二階堂進という田中内閣時代に官房長官を務めた鹿児島の政治家は暗雲漂う戦時下の翼賛選挙に反発して出馬した勇気ある人でした。

アベチルドレンたちは翼賛体制で御身安泰のおつもりか。党内に「禅譲」と「裁定」待ちの雰囲気が充満すれば、これはどこかの王朝国家と同じです。（　投稿　2018・8・20　）

身を切る改革でカジノですか？　（2019．10）

き一太　　（狩場台）

日本維新の会の決まり文句「身を切る改革」がさっぱりわからない。オオサカのヨシムラ知事はカジノを熱望し、慰安婦を思わせる少女像に激怒し、あいちトリエンナーレに文句をつけ、過激発言で政界にその名を売り出そうとしているようだ。維新の元祖のハシモト氏がヨシムラ氏のことを「ボクよりはるかに過激」とかなんとかつぶやいていたから、ウソじゃないらしい。

けれど、維新の会がオオサカから日本をどう変えたいか、これは政治学者、わけても地方自治の専門家たちが以前から疑問を呈してきたことでもある。ただ、マスコミの上ではにぎやかで、ヨシムラ知事はマツイ・オオサカ市長とコンビで公明党にけんかを売り、一度は住民の審判が下った「都構想ノー」をまたひっくり返そうとする。私にはまるで、ロシアのプーチンとメドベージェフが大統領と首相を入れ替えっこして権力を維持する構造そっくりに見える。さながら「オオサカ・ミニロシア国」か。アベ政権が「改憲」の旗を降ろしたらおしまいで「都構想」をやめたら維新も同じか。

口ばかり達者なハシモト氏は神戸市民かつ兵庫県民の私になにひとつ政治家としての教訓を残してくれませんでした。政界を退いてから言い訳めいた発信を続け、たとえば、あのモリトモ学園事件の伏線となった小学校の認可要件の緩和については自分の在任時の「民営化路線」から出てきたことは認めたようだ。が、ご自身はまったくあの件にかかわりなしでしょうか。

「既得権の打破」が維新の売り物でしたが、その路線はサビついた小泉構造改革の延長に過ぎません。郵政民営化のゆきついた先はかんぽ商法の不正でも明らかでしょう。それをオオサカのローカルでますます民営化を、といっているだけです。民営化とは公務員をたたき、営々と築いた市民財産を払い下げる荒っぽい手法です。

その一方で維新のリーダーはカジノに大乗り気。ミナトヨコハマでは市政を揺るがす大問題に発展しているけれど、オオサカは自信たっぷりのよう。はたして庶民の町オオサカにふさわしい施設かどうか、ビンボーな私は「カジノはアミューズメント」なんて言われても、ピンときません。共同電（発信元は米メディア）によると、カジノ業者と親しいトランプ氏はアベ首相にカジノ参入を働きかけていたというのですが、維新の知事・市長コンビは「オオサカが儲ければなんでもありがたや」か。大阪港のゴミ埋め立て地を「宝の島」へと、あわよくばカジノ事業者に地下鉄の延伸費用も負担させるつもりらしい。まさにオオサカファースト「捕らぬナントカ」のがめつさだ。

いくら「統合型リゾート」といっても、周囲に国際会議場とかホテルとか珍しくもなんでもない施設を配置しても核心部分は「とばく場」でしかありません。結局、維新の会の最終目的は万博後の「カジノによる町づくり」に尽きるのではないか。これはモノマネでしかないし、「オモテナシの文化」と呼べそうもない。オオサカをラスベガス、シンガポールのように？いったいだれのため？

ちなみにこの国では公営ギャンブル廃止論が頭をもたげ、赤字の地方競馬がどんどん廃止された歴史も思い出そう。その旗振り役は半世紀前の兵庫県知事の阪本勝氏だった。いまの政権も大都市のリーダーもアタマを使わぬ小モノばかりといったら怒るだろうなあ。けれどホントでしょう。　（　投稿　2019･9･28　）

ケチることの時代錯誤　（2020．5）

き一太　　（狩場台）

おカネを使うことは結局だれかにおカネを回すこと。点滴のようなリレー効果はある。ならばコロナ対策の国民支給一人当たり 10 万円は積極的に使うべきではないか。

コロナショック吹き荒れる中、私は首をすくめてアタマの体操を続けています。昨年来、「反緊縮」の経済本を読み、政府がいま財政出動をケチれば失業者があふれないか心配です。

反緊縮の立場を代弁する一人に、TV やネットでおなじみの京大の藤井聡氏がいます。その著「令和日本・再生計画」を読むと、いまの日本はまぎれもない「衰退途上国」であり、平均年収250万円は目前。消費税アップとコロナショックのあおりで、この国の水準は遠からずインドネシア並みになると警告を発しています。

また松尾匡・立命館大教授らによる「反緊縮宣言」も国の積極財政を求め、米国のサンダース氏やヨーロッパの新しい政治運動の潮流を紹介しています。「ビンボー人にカネをよこせ」は政治的な左右対立とは無関係で、貧富の差こそ問題と見ています。

経済学の論壇では昨年来、米国発の MMT（現代貨幣論）が天動説か地動説かと話題を呼びましたが、しろうとの私は難しく考えません。他国に頼らず独自通貨を発行できる国は悪性インフレをコントロールできる限り政府支出を増やしてよい、いやそうすべきだというのが彼らの主張の根幹です。経済成長とは GDP を増やすことが大前提で、これを無視して増税すれば景気の腰が折れる。これもわかります。

ケインズは失業を減らすことを一番の目標に、政府支出の増大と需要の創出を唱え、ニューディール政策を導きました。反緊縮論者たちも基本的にケインズの流れを踏襲しますが、政府の財政

赤字は民間部門の黒字と表裏一体とみて、日本国全体のバランスシートの方を重視します。国債発行を続けても政府借金は子会社の日銀が肩代わりしており、財政破綻は起りにくいというのです。

私のようなビンボー人は昔の大蔵官僚がぶち上げた「政府借金は1万円札を積み上げると富士山の高さになる」の一言におびえたものですが、その感覚を引きずると出口が見えなくなると痛感します。思い起こせば、「地本主義」とまで呼ばれた列島改造期の土地バブルは総需要抑制策、土地融資の規制で切り抜けた。問題はその後、民間ではコストカット、政府借金は縮小が錦の御旗となったことです。

それにしてもダラダラと何十年も「政府にカネがない」と言い張るのはどういうことか。結局は安易に税収不足を国債（借金）で補い、そのうち景気が良くなれば増税という根拠なき成長神話に甘えていたから。要するに「そのうち何とかなるだろう」のいい加減がアソウ財務大臣の人相にも引き継がれていはしないか。

政府にはカネをつくる力があるし、いまそれを怠ると再起不能になる。それをさておいてビンボー人が「倹約は美徳」と信ずれば本末転倒の悲劇でしょう。　（　投稿　2020･4･25　）